

マタイ傳福音書

大正訳

第一章

1 「アブラハムの子、ダビデの子、イエス・キリストの系圖。」

「アブラハム」○アブラハムは紀元前二千年の人

21 「三かれ子を生まん、汝その名をイエスと名づくべし。己が民をその罪より救ひ給ふ故なり」

○イエスとはエホバの神より出づる救と云ふ意なり。ヘブル語にてはヨシユア。希臘語にてはイエスと云ふ。

23 「三『視よ、處女をじめもりて子を生まん。その名はインマヌエルと稱となへられん』之を釋とけば、神われらと偕ともに在いま

すといふ意なり。」

○賽イザ七 14

「インマヌエル」○ヘブル語

第二章

1 「イエスはヘロデ王の時、ユダヤのベツレヘムに生れ給ひしが、視よ、東の博士たちエルサレムに來りて言ふ、」
 「ヘロデ王」○ヘロデ王の父はエドム人にて、アンテパネルと云ふ。ヘロデは狡猾にして、ローマの貴顕にへつらひ、ユダヤの内乱に乗じてローマ王の命により、ユダヤ王に封ぜられ、紀元前三十七年より四年に至るまでユダヤを支配せり。ヘロデ大王と云ふは之なり。

「ベツレヘム」○ベツレヘムはエルサレムの南方二里。ベツレヘムとナザレとは約三十里距れり。ベツレヘムはダビデ王の生まれたる先祖の故郷なれば、戸籍につかんとて帰れるなり。

「博士たち」○三人なりと云ふ。博士の来る處バビロンならば、二百里以上。博士は占星者である。ペルシヤ方面、其当時占星術が盛んに行はれた。

6 「六」ユダの地ベツレヘムよ、汝はユダの長たちの中にて最小き者にあらず、汝の中より一人の君いでて、わが民イスラエルを牧せん」と録されたるなり」

○イエスは実に神よりつかはされたる王なり。靈魂を支配し給ふ永遠の王なり(米五2)。紀元前凡そ九百年、ダビデ王は凡一千年前。

11 「二家に入りて、幼兒のその母マリヤと偕に在すを見、平伏して拜し、かつ寶の匣をあけて、黄金・乳香・沒藥など禮物を献げたり。」

○貴人に見ゆる時、礼物を捧ぐるは東方諸国の習慣であつた。

15 「五へロデの死ぬるまで彼處かしこに留りぬ。これ主が預言者によりて『我エジプトより我が子呼び出せり』と云ひ給ひし言の成就せん爲なり。」

○ホゼヤ一 1、前凡おおよそ七百年の人。

○へロデ王の死にたるは、多分其翌年なりしならん。

16 「六ここにへロデ、博士たちに賺うかされたりと悟りて、甚だしく憤ほり、人を遣し、博士たちに由りて詳細つまびらかにせし時を計り、ベツレヘム及び凡てその邊ほとりの地方なる、二歳以下の男の兒こをことごとく殺せり。」

○ベトレヘムの人口は、当時約四千人なりしと云ふ。

18 「八『聲こゑラマにありて聞ゆ、慟哭なげきなり、いとどしき悲哀かなしみなり。ラケル己が子らを歎なげき、子等のなき故に慰めらるるを厭いとふ』

○ラマはエルサレムの北約二里。此預言は、直接にはエレミヤの時の事にて、バビロンの兵の為にユダヤ人の幼子まで奪ひ去られたりとなり(耶三二 15)。(エレミヤ、紀元前凡六百年の人)

「ラケル」○ラケルは紀元前約二千年、ヤコブの妻にてベトレヘムとエルサレムとの中間に葬られたり。(創三 19) 故に此処にはユダヤ人の婦人と云ふ意なり。

23 「三ナザレといふ町に到りて住みたり。これは預言者たちに由りて、『彼はナザレ人と呼ばれん』と云はれたる言の成就せん爲なり。」

○ルカ一 26によれば、ヨセフとマリアは始めよりナザレに住んで居たのである。ユダヤはアケラオ支配し、ガリラヤは兄弟アンテパス之を支配。

第三章

7 7「ヨハネ、パリサイ人およびサドカイ人のバプテスマを受けんとて、多く来るを見て、彼らに言ふ『蝮まむしの

裔すえよ、誰が汝らに、來らんとする御怒みいかりを避くべき事を示したるぞ。八さらば悔改くわいかいに相應ふきはしき果を結べ。九汝ら

「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言はんと思ふな。我なんぢらに告ぐ、神は此らの石よりアブラハムの子らを起し得給ふなり。一〇斧ははや樹きの根に置かる。されば凡て善き果を結ばぬ樹は、伐られて火に

投げ入れらるべし。一一我は汝らの悔改のために、水にてバプテスマを施す。されど我より後のちにきたる者は、

我よりも能力ちからあり、我はその鞋くつをとるにも足らず、彼は聖靈と火とにて汝らにバプテスマを施さん。一二手に

は箕こを持ちて禾場こむらをきよめ、その麥は倉ぐらに納め、穀は消えぬ火にて燒きつくさん』

〇パリサイ人、サドカイ人はアブラハムの正統のユダヤ人なれば、それだけにて神の國に入りうると思つて居

た。されど神は無價値なる、無資格なる異邦人、罪ある人、取税人をも化して、よくアブラハムの子となし

給ふ。

9 「九汝ら「われらの父にアブラハムあり」と心のうちに言はんと思ふな。我なんぢらに告ぐ、神は此らの石より

アブラハムの子らを起し得給ふなり。」

「アブラハムの子」〇アブラハムの子とは、信仰に於てアブラハムならに倣ならふ者ではないか。肉に於てアブラハムの

子孫たるも何の値あらん。

第四章

1 「ここにイエス御靈によりて荒野あらのに導かれ給ふ、惡魔に試みられんとするなり。」

○能力が加はりて後に試み、イエスの生涯に最も重大な出来事の一つ、ミルトンの樂園の回復は之をうたつたものである。イスラエルの歴史は荒野と離れぬ。モーセ、エリヤ、アモス、バプテスマのヨハネ、パウロ皆そうである。荒野は偉人の鍛錬所であつた。エルサレムの東南十五、六里、急傾斜をなして、死海に下るところ、これユダの荒野である。修道院である。孤獨寂寞を感じる。父母も兄弟も友人も居ない。ロビンソン・クルーソーである。

2 「四十日四十夜斷食して、後に飢ゑたまふ。」

○モーセは四十日四十夜シナイの山に居た。試みは人によつて、又境遇によつてちがふ。イエスは我が愛子なりとの御言を受けた。

3 〽11 「試むる者きたりて言ふ『汝もし神の子ならば、命じて此等の石をパンと爲らしめよ』^四 答へて言ひ給ふ『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言ことばに由る』^五 ここに惡魔イエスを聖なる都につれゆき、宮の頂上に立たせて言ふ、^六 『汝もし神の子ならば己が身を下に投げよ。それはなんぢの爲に御使みつかひたちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支へ、その足を石にうち當つること無なからしめん』と録されたるなり』^七 イエス言ひたまふ『主なる汝の神を試むべからず』と、また録されたり』^八 惡魔またイエスを最高き山につれゆき、世のもろもろの國と、その榮華とを示して言ふ、^九 『汝もし平伏して我を拜はせ

ば、此等を皆なんちに與へん』^{わた}。一〇ここにイエス言ひ給ふ『サタンよ、退け「主なる汝の神を拜し、ただ之にのみ事へ奉るべし」と録されたるなり』^み。一一ここに悪魔は離れ去り、視よ、御使たち來り事へぬ。』

○悪魔は之を疑はしめんとす。若し神の子ならばと。人に肉の食物あり、靈の食物あり。又神の命令なきに石をパンとしてはならぬ。イエスはすべてを神にまかせて居られた。神はパンをふらせ給ふか。御使によつて送り給ふか。イエスは従順の子供の如く、神の与へ給ふを待つて居た。イエスは石をパンとすることも出来た。しかし、神のさしずつなくては何もなされなかつた。殊に食ふべからざるパンを食つてはならぬ。第一、イエスはこれ我愛子、わが悦ぶ者なりの御声で充分満足。第二は、神を疑ひ、父の愛を試みしめんとするのである。イエスをして、父の愛を疑つて、証拠を奇跡に求めしむ。これ父の尊嚴をけがすものである。三位一体の關係を破るものである。第三、目的の為に手段は問ふ所にあらず。我を利用せよ、然らば勞少くして功倍せん。イエスは、神の國の建設に悪魔の助けは寸毫もかりることを要せずと。アダムはサタンに負けた。イエスはサタンに勝ち給ふた。サタンの目的は、イエスを神よりひきはなし、神のイエスを世にくだし給へる目的を、失敗に帰せしめんとしたのである。若し、此時悪魔に負けたならば、人類の救ひは世に來らなかつたのである。神我を愛するならば、直に此雪を消し給へ、此病氣を直にいやし給へ、我に巨万の富を与へ給へなど、神を疑ひ、試むることは不可なり。

○悪魔は、始めイエスの能力を試さしめんとした。次に父の愛を試さしめんとした。イエスの事業の完成は甚だ迂遠のやうであつた。悪魔と妥協すれば近道のやうに見えた。キリストの途は悪魔の途とはちがつた。

4 「『答へて言ひ給ふ』『人の生くるはパンのみに由るにあらず、神の口より出づる凡ての言に由る』と録されたり』

○申八 3

6 「六」汝もし神の子ならば己が身を下に投げよ。それは「なんぢの爲に御使たちに命じ給はん。彼ら手にて汝を支へ、その足を石にうち當つること無からしめん」と録されたるなり」

○悪魔は常に甘言を以て人をあざむく。生活問題も靈魂問題と離すことは出来ぬ。收賄事件は皆そうである。

7 「七」イエス言ひたまふ「主なる汝の神を試むべからず」と、また録されたり」

○申六 16

第五章

1 「イエス群衆を見て、山にのぼり、座し給へば、弟子たち御許にきたる。」

「山」○山は口碑によれば、ガリラヤ湖の西にあるハッテン山と云ふ岳ならんと云ふ。カペナウンを距る西南二里半。後世十字軍最後の戦は此辺なりしと云ふ。

3 3 12 「三」『幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。』四 幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。五 幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。六 幸福なるかな、義に飢ゑ渴く者。その人は飽くことを得ん。七 幸福なるかな、憐憫ある者。その人は憐憫を得ん。八 幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。九 幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。一〇 幸福なるかな、義のため
に責められたる者。天國はその人のものなり。二 我がために、人なんぢらを罵り、また責め、詐りて各様の
悪しきことを言ふときは、汝ら幸福なり。三 喜びよるこべ、天にて汝らの報は大なり。汝等より前にありし
預言者たちをも、斯く責めたりき。」

○天國の福音。俗人の幸福は主として外形。福音の云ふ所は主として内的。幸福なるかなと云ひても、其人が自ら幸福を感じると云ふではない。イエスは、神の子たる權威を以て、之を祝福し給ふたのである。

暗唱すべし。

3 「三」『幸福なるかな、心の貧しき者。天國はその人のものなり。』
「天國」○天國、此世にては、信仰に入りて歡喜と平和の心を与へられ、未来に於ては、神の國に入り得るもの。

4 「四」幸福なるかな、悲しむ者。その人は慰められん。」
○心に貧を感じ、己れの罪に泣き、義と聖を實現し得ざるを悲しみ、神の前に頭をもたげ得ざる者(路一八12)。

○物の不足を悲しみ、位の低きを悲しむにあらざ。己れの罪を悲しみ、世の罪を悲しむ者。今直に慰めらるる
と云ふにあらざ、徐々として慰められるべしと云ふなり。

5 「五」幸福なるかな、柔和なる者。その人は地を嗣がん。」

○地をつぐは、此世の主人公となるのである。

○人に対しても、神に対しても柔和である(イエスの柔和、ヨブの柔和)。

6 「六」幸福なるかな、義に飢え渴く者。その人は飽くことを得ん。」

○利をしたい、名をしたふではない。今日は殊に少ない暁天の星が、瓦礫中のダイヤモンドが、人の前に義人として立つではない。神より義とせられんことを求むるのである。即ち罪のゆるしを願ふのである。飽くことを得るは、其一半は此世に於て、一半は未来に於て。

8 「八」幸福なるかな、心の清き者。その人は神を見ん。」

○心の清き者の心に神の姿がうつる。心の清きとは、心にいつはりなき者である。(ナタナネに) 正直者である。

9 「九」幸福なるかな、平和ならしむる者。その人は神の子と稱へられん。」

○人と人との平和、又神と人との平和。

10 「一〇」幸福なるかな、義のために責められたる者。天國はその人のものなり。」

○信仰に對する迫害である。迫害は眞の信仰の付随物である。

○パウロ曰く「故に、我等信仰によりて義とせられたれば、神と和ぐことを得たり」(羅五1)。(コリ)。かくの如きがキリスト者である、此理想を以て日々を送るべきである。

33

「^三また古への人に「いっはり誓ふなかれ、なんぢの誓は主に果すべし」と云へる事あるを汝ら聞けり。」

○誓ふ *swear* と誓願 *vow* とはちがふ。パウ *vow* は誓を附して祈ることである。つまり、強度の祈りであるとするのである(士一一31、母前一(10〜11、徒一八18、二二17以下))。スウエヤー *swear* は自己以外の物を以て、己れの誠実を証明せんとするのである。地は動かずとも、己れの決心は動くこともある。信者は決心の動かざらんことを祈りても、保証はしない。誓ひは自己保証である。

第六章

1 「汝ら見られんために己が義を人の前にて行はぬやうに心せよ。然らずば、天にいます汝らの父より報を得じ。」

○公にすべきものは信仰、ひそかに行ふべきは善行である。

4 「^四はその施濟の隠れん爲なり。さらば隠れたるに見たまふ汝の父は報い給はん。」

○慈善をなしても、端から忘れてしまふ人は、眞の慈善家である。

9 「^九この故に汝らは斯く祈れ。「天にいます我らの父よ、願はくは御名の崇められん事を。」

○信者の祈り。

12 「^二我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給へ。」

○太一八 23 参照

○我等心のうちに憎悪の念を抱く時は、其祈禱は聞かれるには余り不純となる。

19 ～ 21 「^九なんぢら己がために財寶を地に積むな、^{一〇}は蟲と錆とが損ひ、^{二〇}なんぢら己がために財寶を天に積め、かしこは蟲と錆とが損はず、盗人うがちて盗まぬなり。^{二一}なんぢの財寶のある

所には、なんぢの心もあるべし。」

○十九以下は十一の解釈と見ることが出来る。財とはひとり金銭を人に施すことではない。神の為に天國の為に働くこともそうである。

22 「^三身の燈火は目なり。この故に汝の目ただしくば、全身あかるからん。」

○目は外の人の光である。靈魂は内の人の光である。

24 「^{三四}人は二人の主に兼ね事ふること能はず、或はこれを憎み彼を愛し、或はこれに親しみ彼を輕しむべければなり。汝ら神と富とに兼ね事ふること能はず。」

○人は金第一と思ふか、神第一と思ふかに其人生觀は定まるのである。それ金を愛するは諸悪しきことの根なり。或人々之を慕ひて、信仰より迷ひ、さまざまの痛みを以て、自ら己れを刺し通せり（^{テモ}提前六10）。

○欲深き人の心と降る雪は、積もるにつれて道を忘る。金錢も神よりの預り物と思ひ、善きことのために用ひねばならぬ。

33 「^{三三}まづ神の國と神の義とを求めよ、さらば凡てこれらの物は汝らに加へらるべし。」

○然り、何事をなすのも、神第一に働くべきである。御名の崇められんことと務むべきである。

第七章

○七章を約すれば、人は如何にして天國に入り得るかと云ふ問題である。第一、靈の目を開くこと。第二、神の為に働くべきこと。第三、永生を求めよ、即ち天國に入ることを求めよ。第四、天國の門は小さい。第五、世には天國に入るに、大なる門より入れんとする預言者あり。これは偽者なり。第六、聖書を学び、神の誠を實行せよ。

1 「「なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。」

○單に批評する勿れとの意味ではない。自ら神の座に上りて、人を罪に定むるなどの意である。神の権能を侵してはならぬ。而もパリサイ人のなした所である。イエスは彼等の審く所となり給ふた。今日アメリカに行はるる私刑もそうである(ロー一四4、雅四12)。人は己の目より梁木を取ることは出来ない。神より取つて頂くのである。即ち罪許され、靈の目が明かに見ゆるようになりて初めて、正当に罪を裁くことが出来るのである。しかし止むを得ざる限り、批評は慎むべきである。他人を批評するよりも、先づ己を省るべきである。批評するに当りては、なるべく寛大なるべきである。先づ悔改め(己れの罪を認めて)神を信ずべきである。生まれたるままの人は、色盲の如きものである。其判断は正確ではない。人の審きは誤り易い。

「審かれ」○主として神に審かれ(太六14)。

1〜5 「「なんぢら人を審くな、審かれざらん爲なり。 己がさばく審判にて己もさばかれ、己がはかる量にて

己も量らるべし。三何ゆゑ兄弟の目にある塵を見て、おのが目にある梁木うづばりを認めぬか。四視よ、おのが目に梁木のあるに、いかで兄弟にむかひて、汝の目より塵をとり除かせよと言ひ得んや。五偽善者よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。」

○審くは、誰は善人なり、悪人なりと断定することである。

○哲学は知能の審き。宗教は心の審きである。眞に審きし者は神である。神の前にて全て裸にて現れる。

2 「己も裁かれ」○己も神と人にさばかれ

5 「五偽善者よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。」

○人すでに其目より梁木を除かれたらば、始めて人の目の塵を取るべきである。其為に働くべきである。されど其道を軽んじてはならぬ。深き注意と祈りとを要する。

5 6 「五偽善者よ、まづ己が目より梁木をとり除け、さらば明かに見えて、兄弟の目より塵を取りのぞき得ん。

六聖なる物を大に與ふな。また眞珠を豚の前に投ぐな。恐らくは足にて踏みつけ、向き返りて汝らを噛みやぶらん。」

○我等、人の審まはは□そるるに足らず、思ふべきは神の審なり。

「偽善者」○偽善者とは、他人の罪のみ見て、己れの罪を見ざる人。

7 14 「七求めよ、さらば與へられん。尋ねよ、さらば見出さん。門を叩け、さらば開かれん。八すべて求むる者は得、たづぬる者は見いだし、門をたたく者は開かるるなり。九汝等のうち、誰かその子パンを求めんに石を與へ、一〇魚を求めんに蛇を與へんや。一一さらば、汝ら悪しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。」

まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。二さらば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。三狭き門より入れ、滅にいたる門は大きく、その路は廣く、之より入る者おほし。四生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出す者すくなし。」

○何事をなすにも祈禱し、人の力に及ばぬことは神に求めよ。聞かれぬとて失望せず、熱心に求めよ。

○伝道も神の御旨を先にすべきである。軽率にすべきにあらず。殊に福音を重んずべし。軽々しく之を汚すべからず。

○何事も神に頼れ。

○特に天國に入り得るよう其門を叩け。

「求めよ」○恵みを求めよ

「尋ねよ」○神を尋ねよ

「門を」○天國の門を

11 「二さらば、汝ら惡しき者ながら、善き賜物をその子らに與ふるを知る。まして天にいます汝らの父は、求むる者に善き物を賜はざらんや。」

「善き物を賜はざらんや」○最も善き賜物は聖靈なり。

12 「三さらば凡て人に爲られんと思ふことは、人にも亦その如くせよ。これは律法なり、預言者なり。」

○「然らば」は、神は善き物を人に与へ給ふ。故に汝等は人に対して善行をなせ。之れ神の恵みに答へまつる所以なり。

「人に為られん」○愛

「人にも亦その如くせよ」

○愛

○ナイチンゲール、リビングストーン

13 「三狭き門より入れ、滅ほろびにいたる門は大きく、その路は廣ひろく、之より入る者おほし。」

○汝等、数の少なきを恐るる勿れ。先づ悔改めの門、信仰の門、十字架の門をくぐらざる者は、天國に入るこ
と能はず。

○眞面目なる人は毎つねづねに少数なり。多数決の誤り。バラバとキリスト。藪医者あしひ者の玄関、畏や網の入口は広い。

14 「四生命にいたる門は狭く、その路は細く、之を見出す者すくなし。」

「生命にいたる門」○十字架

15 「五偽預言者に心せよ、羊の扮装よそほひして來れども、内は奪かすひ掠かすむる豺狼おほかみなり。」

○世に教師多し、教へ多し。

21 「三我わがに對むかひて主よ主よといふ者、ことごとくは天國に入らず、ただ天にいます我が父みこころの御意をおこなふ者のみ、
之に入るべし。」

○或人モハメットに問ふ。神の最も好み給ふものは何か。曰く、悔改たる罪人。最も嫌ひたる者は何か。曰く、
背教者。

第八章

2 「^一視よ、一人の癩病人^{らいびょうじん}みもとに來り、拜して言ふ『主よ、御意^{みごころ}ならば、我を潔くなし給ふを得ん』」

○癩病人は、自ら求め願いて癒され、僕は、他人が僕の為に祈りて癒され、ペテロの外姑は、イエス自ら進んで癒し給へり。救はるべく自ら求むるは一なり。他人の救はるるために祈るは其二なり。イエス自ら救ひ給ふは(ボウロの例) 其三なり。

4 「^四イエス言ひ給ふ『つつしみて誰にも語るな、ただ往きて己を祭司に見せ、モーセが命じたる供物^{そなへもの}を獻げて、人々に證^{あかし}せよ』」

○一、人の家に入るべからず。二、六尺より近づくべからず。三、人に近づく時は唇^{くちばし}を蔽^{おほ}ひ、汚れ汚れと呼ばしむ。

「供物を獻^{たま}げ」○山鳩を獻ぐ

5 「^五イエス、カペナウムに入り給ひしとき、百卒^{ひゃくそつ}長^{ちやう}きたり、」

「カペナウム」

○カペナウムは琵琶湖に於ける大津の如し。そこに六十小隊あり。一小隊は百人。

○カペナウムは、ガリラヤ湖の西北にあり。ダマスコと地中海の通路あたり。繁華なりき。

14 「^四イエス、ペテロの家に入り、その外姑^{しゆうしめ}の熱を病みて臥^ふしをるを見、」

「ペテロ」○ペテロの故郷は、ベツサイダなりしが、其兄弟アンデレと共にカペナウムに移れり。

20 「^二イエス言ひたまふ『狐は穴あり、空の鳥は罅^{ねぐら}あり、されど人の子は枕する所なし』」

○狐とは、此世の狡猾なる王たちであると云ふ(路^{ルカ}一三32)。空の鳥とは、悪魔であると云ふ。枕する所なしは、此世に入れられぬと云ふのである。我國は此世の國にあらず(約^{ヨハ}一八36)。汝等も去らんとするか(約^{ヨハ}六67)。凡ての人汝等をほめなば、汝等禍なり(路^{ルカ}六26)。

22 「^三イエス言ひたまふ『我に従へ、死にたる者にその死にたる者を葬らせよ』」

○人は機會を一度失へば、二度を得がたきことがある。其弟子は、その時イエスを離れたならば、其まま帰り得ざる如きものであつたらう。

27 「^七人々あやしみて言ふ『こは如何なる人ぞ、風も海も従ふとは』」

○釈迦は、天上天下唯我独尊と云つた。併^{しか}し、只ナザレのイエスのみ、宇宙を制御する能力ある故に、人類を救ふことが出来るのである。又終りの日に、我等をも甦^{よみが}しうるのである。

28 「^八イエス彼方にわたり、ガダラ人の地にゆき給ひしとき、悪鬼に憑^よかれたる二人のもの、墓より出できたりて之に遇ふ。その猛きこと甚だしく、其處^{そこ}の途^{みち}を人の過ぎ得ぬほどなり。」

「ガダラ」○ガダラは湖水の東南。長五里、幅三里位。

第九章

1 「イエス舟にのり、渡りて己が町にきたり給ふ。」

「己が町」○カペナウム。カペナウムは湖の北岸。

2 「視よ、中風にて床に臥しをる者を、人々みもとに連れ來れり。イエス彼らの信仰を見て、中風の者に言ひたまふ『子よ、心安かれ、汝の罪ゆるされたり』」

○病気のうちには、自分の罪、或は親の罪の結果なることもあり。然る時は、其罪許さるれば、病氣も癒ゆるのである。キリストの在る所必らず敵があつた。十字架である。人の罪を許すは、神の外は出来ないのである。然るにイエスは、自分を神と同等の位置におく。此世の罪を許し、或は軽くするは、天皇より外になし得ないのである(特赦)。罪の許されたか否は、目を以て見ることはない。されど病氣の癒されたことは見ることが出来る。

5 「^五汝の罪ゆるされたりと言ふと、起きて歩めと言ふと、孰^{いづれ}か易き。」

○起きて歩めと云ふ方が難しい。

9 「^九イエス此處より進みて、マタイといふ人の收税所に坐しをるを見て『我に従へ』と言ひ給へば、立ちて従へり。」

○イエス一度呼び給ふ時、利慾の権化たる收税人も、心を改めて、生れ變りて、信者となつた。マタイ伝のよく詳しく書かれしは、マタイの如何にも事務に達して居たことを思わせる。

10 「¹⁰家にて食事の席につき居給ふとき、視よ、多くの取税人・罪人ら來りて、イエス及び弟子たちと共に列る。」

○罪人とは、多分取税人の下役なるべし。我は義人なり、我は健康なりと云ひ、實はその反対であることがわかる。取税人は聚斂しゅうれんの吏にして、又ローマ政府の役人なりしを以て、國賊賣國奴と見なされた。支那のことわざに、

聚斂の吏は虎よりも恐るべしと。キリストは其弟子を、パリサイ人や學者のうちより選ばず、漁夫や取税人よりとつた。これまた彼等の喜ばざるところであつた。マタイは、イエスをキリストと信じて、其弟子となるや、同僚や下役等を招き、またイエスの臨席を乞ふて、己れの態度を明かにし、新境涯に入ること告白した。

13 「¹³なんぢら往きて學べ、「われ憐憫あはれみを好みて、犠牲を好まず」とは如何なる意ぞ。我は正しき者を招かんとあらで、罪人を招かんとて來れり」

○神を祭ると云ひて、憐みの心を持たず、又苦しむ人を助けざるは、神の御心に叶はず。己れの罪を悟らず、自分は義人なりと思ふ者は、神の御心に叶はざるものである。弱き人、悪しき人にも同情し、所謂罪を憎んで人を憎まずの態度を取るべきである。憐れみある人となるべし。高ぶることなかれ。

『犠牲』 ○まつり犠牲ホセ (何六6)。

14 「¹⁴ここにヨハネの弟子たち御許みもとにきたりて言ふ『われらとパリサイ人は斷食するに、何故なんぢの弟子たちは斷食せぬか』

○パリサイ人のみならず、ヨハネの弟子迄まで非難した。「しばしば斷食するに」とあり。信仰も形式となりては

駄目なり。

16 「^二六誰も新しき布の裂を舊き衣につぐことは爲じ、補ひたる裂は、その衣をやぶりて、破綻^{ほろび}さらに甚だしかるべし。」

○眞の意義ある改善改革を始むべきである。

17 「^七また新しき葡萄酒をふるき革囊^{かはぶくろ}に入ることは爲じ。もし然せば、囊はりさけ酒ほどばしり出でて、囊もまた廢らん。新しき葡萄酒は新しき革囊にいれ、かくて兩^{ふたつ}ながら保つなり」

○靈と眞、二重生活、新旧の衝突、封建時の慣習の持続。

「革囊」○革袋は、山羊の胃袋にて作れりと云ふ。

18 「^八イエス此等のことを語り給ふとき、視よ、一人の司きたり、拜して言ふ『わが娘いま死にたり。されど來りて御手を之におき給はば活きん』」

「司」○^{マル}(可五 22、路八 40〜41) によれば、會堂の司の名はヤイロ。

22 「^三イエスふりかへり、女を見て言ひたまふ『娘よ、心安かれ、汝の信仰なんぢを救へり』女この時より救はれたり。」

○イエスは生命を与へ給ふ。イエスを信ずる者は、死ぬるとも生くべし。娘を甦らせ給へる大目的は、イエスに人を甦す力あることを示し給へるものである。みだりに何人にも繰返さるべきものではない。只我等は、終りの日に於て、イエスによつて甦らされ得ることを信ずるのである。

25 「^五群衆の出されし後、いりてその手をとり給へば、少女おきたり。」

○信仰無き者の前に、奇跡は行ふべきではない。

28 「^二ハイエス家にいたり給ひしに、盲人ども御許に來りたれば、之に言ひたまふ『我この事をなし得と信ずるか』

彼等いふ『主よ、然り』

○靈の目を明らかにせよ。肉体の目より靈の目を開けて頂くことは、更に必要である。世には口ありても、神を賛美し得ざる口あり。賛美の人たれ。

34 「^三然るにパリサイ人いふ『かれは惡鬼の首かしらによりて惡鬼を逐ひ出すなり』

○善き行に悪しき批評。

37 「^{三七}遂に弟子たちに言ひたまふ『收穫かりいれはおほく勞動人はたらきびとはすくなし。』

○誠に人を愛する傳道者は少なし。然り、神の働き人となれ。自分の弟子をつくらんとするのではない。自分の仲間を増やさんとするのではない。政治運動とは全く違ふ。

第一〇章

1 「かくてイエスその十二弟子を召し、穢れし靈を制する權威をあたへて、之を逐おひ出し、もろもろの病、もろもろの疾患わづらひを醫いすことを得しめ給ふ。」

○かくてイエスは、先づ其十二人の弟子を六組に分ちて、傳道のために遣はされた。當時學術は盛であつた。諸所に大學があつた。されどイエス自身勞働者であつた。政治家でも、文學者でも、藝術家でもなかつた。田舎者であつた。今日の傳道師とは甚だ異なる。イエスの弟子は行ひの人であつた。キリスト信者とは如何なる者か。十二人のうち一人の學者、貴族、富者、宗教家のなかつたことは注意すべきである。大部分は勞働者であつた(哥前コリ一 26-29)。最良の教育は、信仰を以て働く筋肉勞働である。ミレーの画。衣食の糧は求道者に求めよ。ピアノも無かつた。健全なる確実なる知識は手と足を通して来る。イエスには教會は無かつた。

2 「十二使徒の名は左のごとし。先づペテロといふシモン及びその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブ及びその兄弟ヨハネ、」

「使徒」○使徒と云ふは、遣はされし者と云ふ意である。學問や智識よりも、熱心で眞面目でなくてはならぬ。又自分の知恵や力で傳道するではない。神の知恵、神の力によつて傳道するのである。「天地を動かす力尋ねれば、か弱き人の誠にぞある」である。ワシントン(ジョージ・ワシントン 1732-1799 アメリカの初代大統領)の獨立戦争も、ジョン・ダーク(ジャンヌ・ダルク 1412-1431 フランス百年戦争の英雄)も、リンコ

ルン(エイブラハム・リンカーン 1809-1865 アメリカ十六代大統領)の働きも皆そうである。

「シモン」○カナン党のシモン、過激派であつた。

4 「^四熱心黨のシモン及びイスカリオテのユダ、このユダはイエスを賣りし者なり。」

「熱心黨」○熱心黨は過激黨であつた。

6 「^六むしろイスラエルの家の失せたる羊にゆけ。」

○先づ近き所より始めよ。自分より始めよ。人に云ふ前に先づ自ら行へ。

○キリストの愛国心。愛国心にも広いと狭いと、深いと浅いとある。自分の國のみ愛し、自分の同胞のみ愛するは、眞の愛国心ではない。只身体に多くの支体ある如く、世界にも多くの國あれば、其各の國が皆良き國に、正しき國となるべく、互に務むることは、誠に必要である。一村に或る數の家あらば、各良き家となるべく、互に努め働くべきである。

「失せたる」○迷へる。

9 「^九帶のなかに金・銀または錢ぜにをもつな。」

○学校の教師が給料を得るは、學問を賣るのではない。只其生活費を得るのである。學問の道は一字千金と云ふ。福音もそうである。傳道者が幾分の献金を得るは、生活費の爲であつて、福音の價ではない。(望月正

門氏の話) 粮かて之を敵に取るは、ナポレオンの戰略であつたと云ふ。

14 「^四人もし汝らを受けず、汝らの言を聽かずば、その家その町を立ち去るとき、足の塵をはらへ。」

○普通の待遇を拒む者は、足の塵を拂ひて其家を去れと云ふのである。尤に聖物を与へ、豚に眞珠を投与ふる

16 「^{二六}視よ、我なんぢらを遣すは、羊を豺狼おほなのなかに入るいるが如し。この故に蛇のごとく慧さとしく、鴿はとのごとく素直なれ。」

○人は狼であると云ふ。果して然るか。普通の場合は、如何にもおとなしく見ゆる。併し、一朝自分の利益の侵害せらるるか、又は其罪を指摘せらるる時は、忽ち狼の如くなる。慈悲に務める父母も、其子がキリストを信ずるに至りし時を迫害する有様は、狼が羊を苦しめるやうである。人の眞の性質は、キリストの福音に會ひて、判然と現はるのである(約^{ヨハ}三20)。而して信者は、悪魔性を除かれしと同時に、防衛攻撃の武器を尽つひく取り上げられた。神によりて強くならんために、自己は弱くされた。之を称して「キリストに定まられたる患難」と云ふ。蛇の如く慧さとしくは「蛇の道はへび」と云ふが、信者もサタンに欺かれぬだけの知恵がなくてはならぬ。時としては、狼も羊の如き容貌をして来りて羊の群を荒らすことがある。人を疑ふはよくない。されど欺かれてはよくない。鳩の如くやさしく、無抵抗主義をとれ。鳩は平和の使であると云ふ。

25 「^{二五}弟子はその師のごとく、僕はその主の如くならば足れり。もし家主いへあるをベルゼブルと呼びたらんには、ましてその家の者をや。」

○汝等。つとめてキリストの如くなれ。主の足跡を踏め。まことの師はキリスト。まことの主はエホバ。

26 「^{二六}この故に、彼らを懼るな。蔽おほはれたるものに露あはれぬはなく、隠れたるものに知られぬは無ければなり。」

○悪を恐れて、觸さわるな。されど世の人の誇おほりを恐るるな。彼等は善を悪とし、光を暗しとすれば、必ず光は光として、正義は正義として輝く時あり。次に迫害を恐るるな。

27 「七ヒ暗黒にて我が告ぐることを光明あかりにて言へ。耳をあてて聴くことを屋やの上にて宣べよ。」

○信仰を明かに発表せよ。

28 「八ヒ身を殺して靈魂たましひをころし得ぬ者どもを懼るな、身と靈魂とをゲヘナにて滅し得る者をおそれよ。」

「滅し得る者」○神

29 「九ヒ二羽の雀は一錢にて賣るにあらずや、然るに、汝らの父の許もとなくば、その一羽も地に落つること無からん。」

○不時の災を恐るるな。災難は何人にも来る。悪人に来れば天罰であるが、善人に来れば恵みである。神は決して其子たる信者を忘れ給はぬ。

30 「三〇ヒ汝らの頭の髪までも皆かぞへらる。」

○神は全てを知り給ふ。

32 「三一ヒされど凡そ人の前にて我を言ひあらはす者を、我もまた天にいます我が父の前にて言ひ顯さん。」

○人の前に信仰をかくすな。(27節を更にくり返す)

33 「三二ヒされど人の前にて我を否む者を、我もまた天にいます我が父の前にて否まん。」

○酒を飲めと云ひ、飲むなと云ひ、佛教がいいと云ひ、キリスト教がいいと云ひ。

34 「三四ヒわれ地に平和を投ぜんために來れりと思ふな。平和にあらず、反つて劍を投ぜん爲きたに來れり。」

○イエスの生れ給へる時、天の使達はうたった。いと高き処には、榮光神にあれ、地には平和、人には恵あれ(路二14)。されど平和は直に來ない。眞の平和に達する先に分争がある。此時、信者のとるべき道は、無

抵抗主義である。

○姑息の平和を求むるな。義は義、不義は不義と明かにせよ。

○十字架他なし。情を捨てて、理に従ふことである。情愛か。聖愛か。此世を愛するは、情愛である。神を愛するは聖愛である。

○父側子あれば、其身不義に陥らず。君側臣あれば、其國亡びず。清盛に於ける重盛の如し。

〔劍〕^{つるぎ} ○分争

36 「^{三六}人の仇はその家の者なるべし。」

○兵士は一旦召集令下らば、親を忘れ、妻子を忘れ、家を忘れ、戰場に向い、國のため、君のために戦ふ如く、信者も神のために覚悟なからずべからず。信仰を捨てずんば、首を斬らんと云はれて、信仰を捨つる者は、君に背きて敵に降参する不忠の徒なり。

38 「^{三八}又おのが十字架をとりて我に従はぬ者は、我に相應しからず。」^{ふさは}

○イエスは弟子にかく教へ、又自ら十字架にかかられた。イエスは、其終りの十字架なることは預知し給ふた。十字架は恥辱である、苦しみである。信者はよろしく之に耐ゆべきである。本間俊平夫人の例。古昔の信者は、皆負ひ難きほどの十字架を負ふた。あなたがたは、如何なる十字架を負へるか。

〔十字架〕 ○神より与へられし十字架

39 「^{三九}生命を得る者はこれを失ひ、我がために生命を失ふ者はこれを得べし。」^{いのち}

○生命を惜しむ者は、之を失ふ。イエスは愛する。眞理を愛するは、道理の愛である。子女を愛するは、情の愛である。情愛の為に道理の愛を枉げてはならない。

40 「四〇」汝らを受くる者は、我を受くるなり。我をうくる者は、我を遣し給ひし者を受くるなり。」

○信者に患難多し。されど感謝すべきは、神御自身が信者と利害、榮辱えいじやくを共にし給ふことである。信者とキリストと父なる神と信仰とは同体である。信者は、キリストと苦難を共にする故に、亦また榮光を共にするのである。

○時に自分に輕き十字架あり、他人に重き十字架のある時がある。其時は、境遇に應じて其人々に同情し、之を助け、之を励まし、之を慰むべきである。パウロは、ステパノの殺さるる時、之を可しとせりと云ふが、そうあつてはならぬ。イエスが十字架に掛かり給ふ時、ヨハネは其傍に居たと云ふが、他の弟子は隠れてしまつた。そうあつてはならぬ。

42 「四二」凡そわが弟子たる名の故に、このちひさ小き者の一人に冷かなる水一杯にても與ふる者は、まことに汝らに告ぐ、必ずその報を失はざるべし」

○小慈善ではない。キリスト者を了解することである。世に憎まるる者に好意を表すのである。小に以て実は大なるものである。其報賞は、イエスを知ることである。其救主たるを信ずることを得るのである。そこに永久生命がある。若し自ら傳道者たるを得ぬ人は、せめて信者に同情せよ。義人の味方たれ。義人に味方せよ。遂に義人となり得べし。

「報」○神より報

第一章

2 3 「ヨハネ牢舎ろうやにてキリストの御業みわざをきき、弟子たちを遣して、」

○イエスは、先づ親友ヨハネに疑はれた。次に弟子に裏切られて、十字架に釘せられた。ヨハネは、死海の東岸マケラマケラス城内の暗き牢獄へ投ぜられた(可六 14)。

○最大偉人たるヨハネも、其理想は此世的であつた。驚天動地の大改革を要望した。世は今も大政治家、大改革者、大活動家として、キリストを要望して、彼に躡おそくのである。ヨハネはイエスを疑つたが、イエスはヨハネを疑はなかつた。

○人の目に大なるものにして、神の前に小なるものあり。人の目に小にして、神の前に大なるものあり。当時の人々ことごとく主イエスに躡おそづいた。神の御計画や御心がわからなかつた。今日も尚然り。

3 「『イエスに言はしむ』來きたるべき者は汝なるか、或は、他に待つべきか』

○イエスの働きは、遅々として振はないやうに見えた。

5 「『盲人めしひは見、跛者あしなはあゆみ、癩病人らいびょうじんは潔められ、聾者おふしはきき、死人は甦よみがへらせられ、貧しき者は福音を聞かせらる。』

○キリストたる証拠。世に憐れなる弱者が恵まれた。

8 「『さらば何を見んとて出でし、柔かき衣を著たる人なるか。視よ、やはらかき衣を著たる者は、王の家に在り。』
○柔きをまとふ者、権者にへつらひて其家にあり。

11 「二誠に汝らに告ぐ、女の産みたる者のうち、バプテスマのヨハネより大なる者は起らざりき。されど天國にて小き者も、彼よりは大人なり。」

○ヨハネは、婦の生みしものであつて、天國の子供は靈によつて生れしものである。神の子である(約三章、^{ヨハ}哥後五 17、^{マテ}馬三 1)。

○イエスは、ヨハネを辯護された。友人はよろしくかくあるべきである。山上の小松も、谷間の大木より上位する道理、其實を異にするのである。

14 「^四もし汝等わが言をうけんことを願はば、來るべきエリヤは此の人なり、」

○見よ、エホバの大なる畏るべき日の來る前に、我れ預言者エリヤを汝等に遣はさん(馬四 5)。ヨハネはユダヤ人として完全な者であつた。誠にエリヤの再生と云ふべきであつた。エリヤは紀元前九百年。

15 「^五耳ある者は聽くべし。」

○今の代の人、眞に他人に同情なし。故に眞の諒解なし。眞理は直感すべし。解剖すべからず。

19 「^九人の子來りて飲食^{のみくひ}すれば、「視よ、食を貪り酒を好む人、また取税人・罪人の友なり」と言ふなり。されど智慧は己が業によりて正しとせらるる」

○眞の知恵は証明を要せず。凡ての人反對するとも、眞理は眞理也。

20 「^{一〇}爰^{こゝ}にイエス多くの能力^{ちから}ある業を行ひ給へる町々の悔改めぬによりて、之を責めはじめ給ふ、」

○病氣を癒され、惡魔を追い出された者のうちにも、其時はありがたかつたと思ふだけで、眞に悔改めぬ者が多かつた。

23 「三カペナウムよ、なんぢは天にまで擧げらるべきか、黄泉よみにまで下らん。汝のうちにて行ひたる能力ある業を、ソドムにて行ひしならば、今日までもかの町は遺りしならん。」

「カペナウム」○カペナウムは、ガリラヤ湖の西北岸。ベツサイダは其東にあり。コラジンは其北にあり。カペラウムはキリストが最も長く住まはれた地なり。

25 「五その時イエス答へて言ひたまふ『天地の主なる父よ、われ感謝す、此等のことをかしこむべき者さだに、みどりし嬰兒にあらはし給へり。』

○イエスは、其公生涯の終に近づくに従ひ、益此世の輕佻浮薄頑陋がんろうを悟られた。智者、達人、道を悟らず。幼児却て能く之を知る。智者は此世の事物を解剖的に見る。慧者さとしものは此世の知恵に秀れた利巧者である。自己を恃む者である。二十余にて当時の世界を征服した歴山大王も、道に於てはダイオゼニス(ディオゲネス) (BC412-BC323?;ギリシヤの哲学者)に遠く及ばなかつた。驕児ナポレオン(ナポレオン・ボナパルト) (1769-1821 フランスの軍人)も、セントヘレナ(南大西洋の島、英領)に於て嘆息した。歴山(アレキサンダー)、シーザー(ジュリアス・シーザー) (BC100-BC44 ローマ初代皇帝)、チャーレマン(シャルマニユー) (カール大帝 742-814 フランク王国王)、曰く、余は力の上に大帝国を立てた。イエスは、愛の上に帝国を立てた。イエスは、確かに人間以上であると。赤子は直覺によつて判断する。祭司、學者、パリサイ人等のイエスを信じ得ざりし所以は、智識の誇りと利慾の念、權勢の慾等が彼等を妨げた。漁夫、取税人、病者、遊女が却てイエスを信じた。イエスが赤子の如き方であつた。

27 「七すべての物は我わが父より委ねられたり。子を知る者は父の外になく、父をしる者は子または子の欲するま

まに顯すところの者の外になし。」

○されど其戒を守らざる者を如何ともする能はず (太^{マタ}一八三)。

30

「三〇 わが軛^{くは}は易く、わが荷は輕ければなり」

○キリストを愛する心あらば、全ての荷は輕し。赤子の如き謙遜なる者に示す。

第二章

2 「『パリサイ人見てイエスに言ふ』視よ、なんぢの弟子は安息日に爲まじき事をなす」

○何六6

3 「『彼らに言ひ給ふ』ダビデがその伴へる人々とともに飢ゑしとき、爲しし事を讀まぬか。」

○ダビデに良きことは、我にも良きなり。我はダビデ以上なり(母前二一1以下)。

5 「『また安息日に祭司らは宮の内にて安息日を犯せども、罪なきことを律法にて讀まぬか。』

○民二八9

○祭司は、安息日にも働く。我は神の宮以上なり。我は安息日をも支配す。我は律令以上なり。儀式、習慣に拘泥して、憐みを行はざるは、神の意に叶はざるなり。パリサイ人の憤懣せしや察すべし。イエスは強く掟に反せるにあらず。我來るは、律令をこぼたんとす。却て、成就せんためなり(太五17)。
安息日ありとて、火事を消さぬものなし。之を利益の爲に用ふるはよろしからず。止む得ざるかぎりは之を延ばすか、或は其以前に之を行ふべし。

18 「『八』視よ、わが選びたる我が僕、わが心の悦ぶ我が愛しむ者、我わが靈を彼に與へん、彼は異邦人に正義を告げ示さん。」

○道を示すべし。

19 「『九』彼は争はず、叫ばず、その聲を大路にて聞く者なからん。」

○巷ちまたに聞こえしめず、宣傳せんてんせず。

20 「^{二〇}正義をして勝ち遂げしむるまでは、傷やなへる葦あしを折ることなく、煙けむりれる亞麻あまを消すことなからん。」

○卑ひしき者をも憐あはれみ、弱よわき者をも助け、ほの暗くらき燈火とうかを消すことなく(賽イサ四二)。

27 「^{二七}我もしベルゼブルによりて惡鬼あくきを逐おひ出さば、汝らの子は誰によりて之を逐おひ出すか。この故に彼らは汝らの審判人さばきびととなるべし。」

○当時パリサイ人のうちに、惡魔を追出すと云はれたる者ありしなり。

28 「^{二八}されど我もし神の靈によりて惡鬼を逐おひ出さば、神の國は既に汝らに到れるなり。」

○待ちに待ちたる尊たうときメシアは来れり。神の國に入る道は開かれた。世の人、イエスに従ふか、背くか、二つに一つなり。中立を許されず。ペテロの如ごとき、ポウロの如ごときも其罪を許されたり。

30 「^{三〇}我と偕ともならぬ者は我にそむき、我とともに集めぬ者は散すなり。」

○世の人イエスに従ふかそむくか二つに一つあり、中立を許されず。

31 「^{三一}この故に汝らに告ぐ、人の凡ての罪と瀆けがしとは赦されん、されど御靈を瀆けがすことは赦されじ。」

○ペテロの如ごときポウロの如ごときも其罪を許されたり。

○聖靈を瀆けがすとは、之を辱はしむる意。毫も反省する心なく、亦悔改むる念なく、徹頭徹尾己れを正義と信じ、他人を惡わるしき者と断定して放言する者なり。偽善者以上なり。靈の目も、智識も全く暗くらき傲慢者なり。

34 「^{三四}蝮まじの裔すえよ、なんぢら惡わるしき者なるに、争まじで善よきことを言ひ得んや。それ心に滿みつるより口に言はるるなり。」

「蝮まじの裔すえ」○パリサイ人を云ふ。

第三章

○七つの喩

- 一、種播き(3以下) 二、からす麦(毒麦)(14以下) 三、からし種(31以下) 四、パン種(33以下)
- 五、隠れたる寶(44以下) 六、良き眞珠(45以下) 七、引き網(47以下)

3 「^{たとへ}譬にて^{あまた}數多のことを語りて言ひたまふ、『視よ、種播く者まかんとて出づ。』

○種を蒔く者はイエスである。傳道者は其助手である。

13 「^三この故に彼らには譬にて語る、これ彼らは見ゆれども見ず、聞ゆれども聽かず、また悟らぬ故なり、」

○彼等は眞理のまま聞けば、益眞理を疑ひ、之に遠ざかる。故に喩えを語る。薬を飲ませるにオブラートに包みて飲まずが如し。

14 「^四かくてイザヤの預言は、彼らの上に成就す。曰く、「なんぢら聞きて聞けども悟らず、見て見れども認めず。」

○賽^{イザ}六 9

○眞理を聞きても悟らず、神を見ても見ざる者世に多し。鋤を以て之を掘り出し、悔改めのジョレン(土砂をかきまぜる農道具)を以て之を柔にし、之に落ちたる種を大事に育て養ふべし。

○受くる者の方から云へば、努めて其靈を清くして(幼子の如くなりて)良き地となるべく雑草をぬき、やさしく温かみのある、謙遜にして深き地とならねばならぬ。邪念を去り、悪習を癈すべきである。

20 「○^{いしち}磽地に播かれしとは、御言をききて、直ちに喜び受くれども、」

○人の心には、先人主となりたる石塊多し。よろしく謙遜と云ふ。

23 「^{いしころ}三 良き地に播かれしとは、御言をききて悟り、實を結びて、あるひは百倍、あるひは六十倍、あるひは三十倍に至るものなり」

○御魂の結ぶ実、仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、増節(加五22)。

○善き花を開きて、之を人に与へ、人を喜ばせ、善き実を結びて、多くの人を富ますべし。

25 「^{あだ}五人々の眠れる間に、仇きたりて麥のなかに毒麥を播きて去りぬ。」

○仇と云ふは悪魔である。ポウロも多くの患難のうちに加へて、偽りの兄弟の難と云っている。似而非なる信者となる勿れ。偽善なる者となる勿れ。

○毒麥は不信者、墮落信者の他の偽りの信者である。

31 33 「^{からしだね}三 また他の譬を示して言ひたまふ『天國は一粒の芥種のごとし、人これを取りてその畑に播くときは、

^三 萬の種よりも小けれど、育ちては他の野菜よりも大く、樹となりて、空の鳥きたり其の枝に宿るほどなり』

^三 また他の譬を語りたまふ『天國はパンだねのごとし、女これを取りて、三斗の粉の中に入れば、ことごとく脹れいだすなり』」

○パリサイ人とサドカイ人のパン種に心せよ(太一六6)。

パリサイ人の偽善、サドカイ人の異端、ヘロデの政治的権力、之により教會は驚くべき急激膨張をなすべし。

されど慎しめよ。これ決して喜ぶべきにあらず。粉は健全分子を表わし、パン種は腐敗分子を、空の鳥は悪

魔である。福音は世に嫌わるるものであるに拘らず、悪魔の分子入り来りて、社會の勢力家と結託し、或は政府の保護を求め、或は富豪の歛心を買ひ、教勢の擴張を計り、清かるべき教會を悪魔の巢となすのである。イギリス聖公會が政府と結託して、無幸の信者を苦しめ、ローマ法皇が暴威を振るへる如し。教會は、貧にして無勢の間のみ清いのである。富みて驕らざるは少なし。少数の腐敗分子心せざれば、全団体を傷ふに至るものである。

○弟子達が何故芥種とパン種の説明を主に求めざりしかと云ふに、毒麦の喩の説明によりて推知し得たればなり。

35 「^{三五}これ預言者によりて云はれたる言の成就せん爲なり。曰く、『われ譬を設けて口を開き、世の創^{はじめ}より隠れたる事を言ひ出さん』」

○詩七八 2

44 45 50 「^{四四}天國は畑に隠れたる寶^{たから}のごとし。人見出さば、之を隠しおきて、喜びゆき、有てる物をことごとく賣りて其の畑を買ふなり。 ^{四五}また天國は良き眞珠を求むる商人のごとし。 ^{四六}價^{あたひ}たかき眞珠一つを見出さば、往きて有てる物をことごとく賣りて、之を買ふなり。 ^{四七}また天國は、海におろして各様のもの^{さまざま}を集むる網のごとし。 ^{四八}充つれば岸にひきあげ、坐して良きものを器に入れ、惡しきものを棄つるなり。 ^{四九}世の終にも斯くあるべし。御使たち出でて、義人の中より惡人を分ちて、^{五〇}之を火の爐に投げ入るべし。其處にて^{なげき}哀哭・^{はがみ}切齒することあらん。」

○天國は神様の國のこと、即ち救いの言葉。

○人若し全世界を得るとも、其生命を失はば何の甲斐あらん(太一六26)。天國は此生命を与ふるものである。

○凡四百年前、ルーテルはエルフルトの寺院に於て古きラテン語の聖書を發見した。シーザーが其友ブルタスの母に送つた眞珠は四十八万円。佛国の旅行家タベルニエーがペルシヤ王に賣りしものは、百八十万円であつたと云ふ。ルーテルの場合に於ての眞珠は、人の義とせらるるは、行に由るにあらず。信仰に由るとの教義であつた。

49 「四九世の終にも斯くあるべし。御使たち出でて、義人の中より惡人を分ちて、」

○世の終りの審判、救はるべき人は幾何あるか人知らず。されど神知り給ふ。

○聖書のうち、再臨につき直接記さるるところは、四百八十箇所。この教義に関する箇所は三万有余の章句がある^{と云ふ}。

52 「五^二また言ひ給ふ『この故に、天國のことを教へられたる凡ての學者は、新しき物と舊き物とをその倉より出さ^{いだ}

家主の^{いへあるし}ことし』」

○新しき誠^{いしめ}も古き誠も、古くより地上に現はれたる寶も、地中に隠れたる寶も、みな之を獲得することを得ると云ふのである。孔子曰く、故きを温ねて新らしきを知らば、以て師となるべしと。古きことにも良きあり。新しきことにも悪しきあり。よく見、判断を誤らざるには、中心の眞理を悟らざるべからず。世には大學者にして、正しき判断をなし得ざる者あり。無學の人にして、正しき判断をなし得る者あり。

第一章

1 12 「そのころ、國守ヘロデ、イエスの噂をききて、^二侍臣^{ヒシム}どもに言ふ『これバプテスマのヨハネなり。かれ死人の中より甦へりたり、さればこそ此等の能力^{チカラ}その内に働くなれ』^三ヘロデ先に、己が兄弟ピリポの妻ヘロデヤの爲にヨハネを捕へ、縛りて獄に入れたり。^四ヨハネ、ヘロデに『かの女を納^いるるは宜しからず』と言ひしに因る。^五かくてヘロデ、ヨハネを殺さんと思へど、群衆を懼れたり。群衆ヨハネを預言者とすればなり。^六然るにヘロデの誕生日に當り、ヘロデヤの娘その席上に舞をまひてヘロデを喜ばせれば、^七ヘロデ之に何にても求むるままに與へんと誓へり。^八娘その母に唆かされて言ふ『バプテスマのヨハネの首を盆に載せてここに賜はれ』^九王憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して、之を與ふることを命じ、^{一〇}人を遣し獄^{ヒシム}にてヨハネの首を斬り、^{一一}その首を盆にのせて持ち來らしめ、之を少女に與ふ。少女はこれを母に捧ぐ。^{一二}ヨハネの弟子たち來り、屍體^{シカバネ}を取りて葬り、往きて、イエスに告ぐ。』

○イエスはヘロデ(アンテパス)を狐に喩られたり(路一三32)。

○ヘロデ王の居城は死海の東マケロス城なり。ヘロデの先妻はアラビアのペトリアの國王アレタスの女なり。ヘロデは之を離縁し、兄弟ピリポの妻ヘロデヤを納^いれたり。ヘロデヤは夫ピリポが父ヘロデ大王の怒に振れてさびしき生涯を送るに對して不平なりしかば、喜んでヘロデアンテパスの誘惑に應ぜり。今日の新しき女のタイプなり。

○ヘロデアンテパスはヘロデ大王の子なり。ヨハネを殺したることを良心に咎められ、イエスの噂を聞きて、

ヨハネが蘇へつたと思つた。ヨハネは一年も牢に入れられて居た。

○言葉は慎しまねばならぬ。驕はしゃも及ばず、ヘロデは後に先妻の父ペトリア王アレタスの為に攻められて敗軍し、ヘロデアと共にローマ皇帝に哀訴せしが、反対党に妨げられ、フランスのリオンに追放せられ、悲惨な最後を遂げた。紀元三十九年、サロメは氷の上を歩いて水に落ち、氷に首を切られて死んだ。踰越に近い春の日、二十九年三月？所はガリラヤ湖の東北隅ベテサイダの辺。

「ヘロデ」○イエスの殺された時の王(路二三・七)。

6 「六然るにヘロデの誕生日に當り、ヘロデアの娘その席上に舞をまひてヘロデを喜ばせられたれば、」

○ふざけたる舞。ヘロデアの奸悪、外面如菩薩(内面如夜叉)

9 「九王憂ひたれど、その誓と席に在る者とに對して、之を與ふことを命じ、」

○ヘロデ、大臣達、ローマ兵の千人長、年寄達を招けり。

13 「三イエス之を聞きて人を避け、其處より舟にのりて寂しき處に往き給ひしを群衆ききて町々かちより徒歩ちほにて從ひゆく。」

○此世の悲しむべき有様を見取り、祈るため。

17 「七弟子たち言ふ『われらが此處にもてるは、唯五つのパンと二つの魚うおとのみ』」

○イエスは此パンに優りたる生命のパンを与へ給ふ(約六・三五)。

我は生命のパンなり。人此パンを食はば永遠に生くべし。我が与ふるパンは我肉也。世の生命の為に之を与へん(約六・四八)。友よ、此生命のパンを食らへ。かくして永遠の生命を受けよ。チャンスチャンスを失ふことなく生

命のパンを食らへ。

主は五つのパンを五千人に与へられた。菓は九層倍、百姓は百増倍と云ふ。主が五つのパンを五千人に分ち給ふとも怪しむに足らず。

20 「^{二〇}凡ての人食ひて飽く、裂きたる餘を集めしに十二の筐に満ちたり。」

○金銭、時間、精力、生涯を濫費する者が多い。物を粗末にしてはならぬ。

22 「^{二三}イエス直ちに弟子たちを強ひて舟に乗らせ、自ら群衆をかへす間に、彼方の岸に先に往かしむ。」

「イエス直ちに」○日暮れんとすイエス直ちに

24 「^{二四}舟ははや陸より數丁はなれ、風逆ふによりて波に難されゐたり。」

○世の中を渡り比べて今ぞ知る阿波の鳴門に波風は無し。(荻生徂徠)

25 「^{二五}夜明の四時ごろ、イエス海の上を歩みて、彼らに到り給ひしに、」

○約六^{ヨハ}15によれば、人々此奇跡に驚き、イエスを王となさんとした。

「海」○ガラヤの海は長五里、幅三里

30 「^{三〇}然るに風を見て懼れ、沈みかかりければ、叫びて言ふ『主よ、我を救ひたまへ』」

○ペテロは目をイエスより離し、風や浪の方に氣を取られたから沈みかけた。常にイエスを仰ぎ、外物に心を奪はれてはならぬ。スポルジョン(チャールズ・スポルジョン 1834-1892 イギリス、バプテスト派の牧師)

は「我を仰ぎ望め、さらば救はれん。」賽四五^{イザ}22の一句によりて信仰に入つた。ペテロは勇敢であつた。又熱情もあり、冒険心にも富んでいた。されどまた、忽ち恐怖に捕へられた。忽ち上より忽ち下るのがペテロ

の特徴であつた。

34 「^{三四}遂に渡りてゲネサレの地に著^つぎしに、」

○ゲネサレは海（ガリラヤ湖）の西北に在る豊なる邑なり。故にゲネサレの海とも云ふ。

○人民が王を擁立するは、ローマ政府に対して反逆である。イエスは之より政府の注意人物となつた。

第一章

2 「二」なにゆゑ汝の弟子は、古への人の言傳を犯すか、食事のときに手を洗はぬなり」

○食前に手を洗ふ習慣であつた。律法に定められたのではない。イエスは彼等が父母に対する義務を怠れるを責め給ふた。当時のユダヤ人は、食前必ず手を洗つた。洗はざること殺罪に等しと思つた。つまらない習慣に一生懸命となつたものである。日本にてもあらずれば汚れる、こうすれば汚れると云つた。ユダヤ人も手を洗はずして牛肉を食へば、身が汚れると云つた時代もある。孟子にも鵝鳥のことがある。「勝文公章句下一〇(六十一)」食物の上等下等によつて、人が清くなり、又は汚れたりするものにあらず。彼等パリサイ人、學者等は賢しと思ひ、正しと思ひて、人に教ふるも、却て人を傷ふ者である。今の世にも然るものがある。安曇節の投票。(「寄れや寄つてこい安曇の踊り田から町から野山から」農作業時に唄われた 1923 年完成)

5 「五」然るに汝らは「誰にても父または母に對ひて、我が負ふ所のものは供物となりたりと言はば、」

「我が負ふ所のもの」○持てる
「供物」○コルバン(へブル語)

6 「六」父または母を敬ふに及ばず」と言ふ。斯くその言傳によりて神の言を空しうす。」

「敬ふ」○養ふ

7 「七」偽善者よ、宜なる哉、イザヤは汝らに就きて能く預言せり。曰く、「

○種々の口実を設けて、なすべき義務責任を果さず、かかる者に限りて他人を責む。

8 9 「八」この民は口唇くちびるにて我を敬ふ、されど其の心は我に遠いたうさかる。九ただ徒らいたうに我を拜む。人の訓誡いましめを教をしへとし教へて』」

○賽イザ二九 13

11 「二」口に入るものは人を汚けがさず、されど口より出づるものは、此人を汚すなり』」

「口に入る」○却て口に入る

12 「三」ここに弟子たち御許に來りていふ『御言をききてパリサイ人の躓つまずきたるを知り給ふか』」

○此事件にてパリサイ人、學者等とイエスとの間全く隔離されるに至つた。

13 「三」答へて言ひ給ふ『わが天の父の植うゑ給はぬものは、みな抜かれん。』」

○之を捨て置け。神は、學者、パリサイ人の他に神の道を傳ふる者を起し給ふた。

18 「八」されど口より出づるものは心より出づ、此人を汚すものなり。』」

○ヤコブ書の三章にも、舌の恐るべきことが記してある。悪しき念ある人は、人をけしかけて、殺人、姦淫、淫行、窃盜を行はせる。きせるさへ心のやにを掃除せず、がんくびばかり磨く、世の人である。

31 「三」群衆は、唾おふし者の物いひ、不具かたはの癒え、跛者あしなの歩み、盲人めしひの見えたるを見て之を怪しみ、イスラエルの神を崇めたり。』」

○今も、悪人も善人に、怠け者も勤勉に、うそつきも正直になる。

39 「三九」イエス群衆をかへし、舟に乗りてマガダンの地方に往き給へり。』」

「マガダン」○マガダンはマグダラに同じ、湖水の西にして、テベリヤより一里なり。マグダラのマリヤの郷里なり。

第一章

1 「パリサイ人とサドカイ人と來りてイエスを試み、天よりの徴しるしを示さんことを請ふ。」

○昔天よりマナの降りたる如き徴を見せよと云ふ意である。しかし神は不必要なマナは一箇なりとも降らせぬ。天の徴と云ふか、夕焼も朝焼も立派な天の徴にあらずや。

○十二章にある彼等は徴しるしを求めたが、今度は天よりの徴を求めた。試みは悪意を以てである。俗に云ふからかうの意。時まさに夕焼しておつたであろう(約六 31)。

○イエスの時の徴と云ひ給へるは、ヨハネの弟子の答へられたる、盲人は見、足なへは歩み云々と云ふべし(太 一一 5)。

而して我等の今の時の徴を如何に見るか。日本国の雛形は國會にあり。代議士は国民の代表なり。議院は國家の代表なり。これ我日本帝國なり。馬券ママを見よ(太 一一 4)。パリサイの徒は傲慢、サドカイの人は放縱、ふざけていた。

○時の徴とは何ぞや。今は恵みの時にあらずや。天國は汝等の前に來りつつあるにあらずや。ヨハネの警告を聞かずや。如何なる徴ありとも、盲は見ること能はず、聾は聞くこと能わず。徴(立派な)を見ても徴と思はずして、徴徴と云ふ不義なる者よ、先づ悔改めて目を開け。昔ヨナの声を聞いて悔改めたるニネベの人々の如く悔改めよ。

5 「^五弟子たち彼方の岸に到りしに、パンを携ふることを忘れたり。」

〔彼岸の岸〕○東北岸ベツサイタの辺

12 〔二〕ここに弟子たちイエスの心せよと言ひ給ひしは、パンの種にはあらで、パリサイ人とサドカイ人との教なることを悟れり。〕

○偽善なる(自ら罪を知らざる、従ひて悔改めざる)パリサイ人の如くなる勿れ。此世の楽しみをのみ目的とする利己的なるサドカイ人に習ふ勿れ。何ぞ物質のパンのみを思ふか。

14 〔二四〕彼等いふ『或人はバプテスマのヨハネ、或人はエリヤ、或人はエレミヤ、また預言者の一人』〕

〔エリヤ〕○エリヤは紀元前約九百年の人。エリシヤはその弟子。

〔エレミヤ〕○エレミヤは紀元前約六百年の人。

17 〔二七〕イエス答へて言ひ給ふ『バルヨナ・シモン、汝は幸福なり、汝に之を示したるは血肉にあらず、天にいます我が父なり。』

○ペテロの信仰は一四33に於てもすでに萌せり。血肉は人間の知恵。信者各ペテロとしていただくべきなり。イエスすでに首石たり。おんいし信者各柱石の一たるべし。徳富蘆花の五分間の夢。太一八18、約二〇23を見れば、決してペテロ一人に与へられた特権ではなく、信仰を持つ者凡てに与へられた特権であり、又責任である。

18 〔二八〕我はまた汝に告ぐ、汝はペテロなり、我この磐いはの上に我が教會を建てん、黄泉の門はこれに勝たざるべし。〕

〔磐〕○信仰の磐

〔黄泉の門〕○死か

19 〔二九〕われ天國の鍵を汝に與へん、凡そ汝が地にて縛ぐ所は天にても縛ぎ、地にて解く所は天にても解くなり。〕

○ユダヤの習慣によれば、人を選びて律法を教ふる位に就しむる時は、其人の手に鍵を与ふことがある。つまり神殿内の律令を入れたる所を開く鍵である。故にこの意味は、天国の福音を述べ伝へる權威を授けた意味である。しかしして其權威を与へられたる者は、ペテロのみならず、他の信徒も与へられたものである。「^{二〇}ここにイエス、己がキリストなる事を誰にも告ぐなど、弟子たちを戒め給へり。」

○イエスは評判の益高くなることを恐れた。

21 「^{二一}この時よりイエス・キリスト、弟子たちに、己のエルサレムに往きて、長老・祭司長・學者らより多くの苦難を受け、かつ殺され、三日めに甦へるべき事を示し始めたまふ。」

○今日の信者も、其当時の弟子の如く、此世に幸福を得んことを希望し、十字架を負ふことを恐れたり。されど永生の門は十字架なるをいけません。十字架の後には必ず復活あり。十字架無くんば冠無し。

23 「^{二三}イエス振反りてペテロに言ひ給ふ『サタンよ、我が後に退け、汝はわが躓物なり、汝は神のことを思はず、反つて人のことを思ふ』」

○其心此世を愛して十字架を負ふことを恐るるは、サタンの誘惑なり。

○何故、又叱られたか。ペテロはイエスをキリストと信じた。しかし十字架に付き給ふ深意は得なかつた。

24 「^{二四}ここにイエス弟子たちに言ひたまふ『人もし我に従ひ來らんとせば、己をすて、己が十字架を負ひて、我に従へ。』」

○イエスの十字架は何であつたか。人の貌を以て来りしイエスが、彼の人間としての弱き身を以て、父なる神より受けたる重き任務を、悉く遂行せんとされたことである。弱き身を以ては到底堪え難くあるに拘らず、

25

敢て之を力行せんとすることが、時に臨む十字架である。キリストにとつて十字架の絶頂は、ゲツセマネの祈りであつた。人間の弱き身は破れて、汗は血の如く地に滴つたのである。

「^五己が生命を救はんと思ふ者は、これを失ひ、我がために己が生命をうしなふ者は、之を得べし。」

○英国の女王エリザベス、死に臨みて曰く「我に一年の壽を与ふる者には百万金を与へん」と。(善且つ、忠なる僕たれ。)

第一章

1 「六日の後、イエス、ペテロ、ヤコブ及びヤコブの兄弟ヨハネを率ひきつれ、人を避けて高き山に登りたまふ。」
 「六日の後」○六日の後は、十六章 21 節より六日の後。

「高き山」○ガリラヤ湖の西南、タボル山。麓より峯まで千呎、地中海面より二千呎。或は曰く、ガリラヤ湖の北方ヘルモン山。高九千呎。其峯は四時いつも雪を頂くならんとも云ふ。

2 「かくて彼らの前にてその状さまかはり、其の顔は日のごとく輝き、その衣は光のごとく白くなりぬ。」

○孔子の弟子に子路ある如し。人の三分性、之を果実に例ふれば、之を蚕に例ふれば、イエスは既に昇天の時近づけり。エリヤの如く、エノクの如く、其まま昇天することを得たるや疑わし。されど十字架を通りて（神の命に従ひて）父の許に帰らんとし給ふ。故に神之を誉め給ふ。バプテスマを受け給へる時の如し。

○変貌は天国に於ける姿なるべし。ペテロは喜びにたへず三つの宮を作りて、之を祀り、多くの人々に拜せしめんとした。

3 「^三視よ、モーセとエリヤとイエスに語りつつ彼らに現る。」

○弟子達は、モーセとエリヤを見た。旧約の預言に、馬マ四 5 に、キリストの現るる前にエリヤ現はるとあるは、今現れたエリヤの事かと聞いた。イエスは然らず、預言者のエリヤとはヨハネを指すものだと言はれた。

○エリヤとヨハネは、多分イエスを迎へるべく現はれたであろう。然るにイエスは、我は十字架を負ふて行かんと言はれたるべし（路ルカ九 31）。

5 「^五彼なほ語りをとるとき、視よ、光れる雲かれらを覆ふ。また雲より聲あり、曰く『これは我が愛しむ子、わが悦ぶ者なり、汝ら之に聽け』」

○(太三 17) これは、我が慈しむ子、我が悦ぶ者なり。一はイエスが聖職に就かんとせらるる時、一はまさに十字架に上らんとせらるる時、イエスを勵まされたのである。又弟子の信仰をあつくすべきためであつた。○イエスの復活の前表である。弟子達の目に、汝等もモーセ、エリヤの如く死なざることを得るぞと示されたのである。

9 「^九山を下るとき、イエス彼らに命じて言ひたまふ『人の子の死人の中より甦へるまでは、見たることを誰にも語るな』」

○イエスは、群衆のイエスを王とせんとして騒動の起らんことを恐れた。信者は天国に於て変貌の山の如く、既に死して甦れる人にも、死なずして昇天せる人にも会ふべし。

17 「^七イエス答へて言ひ給ふ『ああ信なき曲れる代なるかな、我いつまで汝らと偕にをらん、何時まで汝らを忍ばん。その子を我に連れきたれ』」

○ワシントン、リンコルン、ジャンヌダルク、皆信仰によりて、人のなし得ざるところをなした。今日政治家にも、実業家にも、信仰によつて神の為、人の為に尽さんとする人の少なきは、嘆ずべきである。

○イエスの居給ふ所は、清く、勇しく、居給ざる麓は弱く、汚く、迷ひて

20 「^{一〇}彼らに言ひ給ふ『なんぢら信仰うすき故なり。まことに汝らに告ぐ、もし芥種一粒ほどの信仰あらば、この山に「此處より彼處に移れ」と言ふとも移らん、かくて汝ら能はぬこと無かるべし』」

○太一四 31

22 「^三彼らガリラヤに集ひをる時、イエス言ひたまふ『人の子は人の手に付され、』」

○十字架の後には必ず復活あり。

24 「^四彼らカペナウムに到りしとき、納金をめきんを集むる者どもペテロに來りて言ふ『なんぢらの師は納金を納めぬか』」

○丁年以上(一人前の男子)の男子は、毎年半シケル(約七十錢位)の奉納金を宮に納めた。

26 「^六ペテロ言ふ『ほかの者より』イエス言ひ給ふ『されば子は自由なり。』」

○されど租税は一般の人民より納むべきものにて、子には其義務無し。イエスが神の宮を輕んずとの誤解を招かぬために。

第一章

1 「そのとき弟子たちイエスに來りて言ふ『しからは天國にて大なるは誰か』」

○さてイエス変貌の山を下り、ガリラヤを過ぎ、カペナウムに至り、家に入りて弟子達に問ふ。「汝等道すがら何を論ぜしか。」弟子達黙然たり。これは、道すがら誰か大ならんと互に争ひたるによる(可九 33)。エリヤ、モーセ、イエス等の其話題に上りしならん。

○弟子達は皆偉い人になりたいと思っていた。むしろ威張りたいと思っていた。

3 「三」『まことに汝らに告ぐ、もし汝ら翻へりて幼兒の如くならずば、天國に入るを得じ。』

○翻へりては、心を入れ替へて、人新に生れずば、神の国を見ること能はず(約三 3)。人若し頭たらんと思はば、凡ての人の僕となり、凡ての人との役者となるべし(可九 33、35)。

4 「四」されば誰にても此の幼兒のごとく己を卑うする者は、これ天國にて大なる者なり。」

○眞正の偉人は、自ら其偉人たることを知らぬものである。又大人は赤子の心を失はぬものである。人の見て大なることが、却て神の目に小さく、人の見て小となすことが、却て神の見て大となし給ふことがあるのである。

「己を卑うする者」 ○謙遜

7 「七」この世は躓物あるによりて禍害なるかな。躓物は必ず來らん、されど躓物を來らす人は禍害なるかな。」

○思ひがけぬ行や言で人を躓かすことがある。キリスト者は殊に言行を慎しむべきである。純眞なる男女も此

世の誘惑に会ふべし。

14 「^四かくのごとく此の小さき者の一人の亡ぶるは、天にいます汝らの父の御意に^{みこころ}あらず。」

○一人の亡ぶるも、神の憎み給ふところ。

「小さき者」○小さき者は卑しき女子や子供。

15 「^五もし汝の兄弟罪を犯さば、往きてただ彼とのみ相對して諫めよ。もし聽かば其の兄弟を得たるなり。」

○諫言は一番槍に優る。

19 「^九また誠に汝らに告ぐ、もし汝等のうち二人、何にても求むる事につき地にて心を一つにせば、天にいます我が父は之を成し給ふべし。」

○イエスは祈る時己が部屋に入り、戸を閉じて、隠れたるに居ます汝の父に祈れと(太六 6)。一人の祈りを教へ給ひたるが、ここには共同の祈りの大切なることを教へ給ふたのである。二人心を同ふすれば、其利金を絶つと云ふ。ペンテゴステのリバイバルは、百二十人の同志が十日間、心を一にして祈つた結果である。

○父なる神に於ては、一個の靈魂は全世界も優りて尊きものである。

24 「^四計算を始めしとき、一萬タラントの負債ある家來^{けらい}つれ來^{きた}られしが、」

「一萬タラント」○二千四百万円

27 「^七その家來の主人あはれみて之を解き、その負債を^{ゆる}免したり。」

○此教訓についても、神の愛と十字架の恵みである。佛王ルイ十二世の話。福音は罪の許しの福音である。神が人の罪を許し、人が互の罪を許すのである。人は神に対して罪を犯して、其御心を傷つけ、人は人に罪を

犯して、其心を傷つけ、其心の傷を癒すのが許すことである。傷を癒すに二つの方法あり。一は外にありて、キリストの十字架を仰ぐことである。一は内にあり、祈りて聖霊を受くることである。体強き者、病早く癒ゆ。信仰強き靈に満つる者は早く人の罪を許す。怨、鬱積は貧弱の証である。人の罪許す最も善き方法は、敵の為に祈ることである(太五44)。

○堪忍は無事長久の基

28 「^八然るに其の家來いでて、己より百デナリを負ひたる一人の同僚にあひ、之をとらへ、喉を締めて言ふ「負債を償^{つぐ}へ」」

「百デナリ」○三十円

35 「^{三五}もし汝等おのおの心より兄弟を赦さずば、我が天の父も亦なんぢらに斯のごとく爲し給ふべし」」

○復讐を先天的に賞せられたる日本人、福音を諒解するは難きことである。

第一章

1 「イエスこれらの言を語り終へて、ガリラヤを去り、ヨルダンの彼方なるユダヤの地方に來り給ひしに、」

「ユダヤ」○東方ユダヤ

3 「パリサイ人ら來り、イエスを試みて言ふ『何の故にかかはらず、人その妻を出すは可きか』」

○日本は世界に於て最も離婚の多き国であると云はれるは、はずかしめ 辱である。当時離婚につきては、夫の意志のままに離婚してよいと云ふ説と、姦淫の他離婚すべからずとの説と争ひがあつた。結婚は慎まざるべからず。貞操は女子にのみ求むべからず。男子も亦然り。女子に處女あり。男子に童貞あり。ペルシヤ王がイギリスを訪問した時、あたか 恰もグラッドストーンの金婚式を祝つていて、其清福の有様であるに感じ、余は五十年間に五人の妻を持ち、彼は五十年間に一人の妻を持つたが、彼は確に我より幸福であると嘆息した。

5 「五」かかる故に人は父母を離れ、その妻に合ひて、二人のもの一體いったいとなるべし」と言ひ給ひしを未だ讀まぬか。」

○創二 24

7 「七」彼らイエスに言ふ『さらば何故モーセは離縁状を與へて出すことを命じたるか』」

○申二四 1

12 「二」それ生れながらのえんじん 閨人あり、人に爲られたる閨人あり、また天國のために自らなりたる閨人あり、之を受け容れうる者は受け容るべし』」

○バルナバ、ポウロ、ヨハネ等は独身生活を送つたであろう。コバンダテが大事。

14 「^四イエス言ひたまふ『^{をばなこ}幼児らを許せ、我に來るを止むな、天國はかくのごとき者の國なり』」

○其子供が後に殉教の死を遂げたイグナシアスであったという傳説がある。小兒は我等の後継者である。年若き者のために考へねばならぬ。なるべく之をイエスに連れて來るべきである。イサク、ヤコブを祝し(創二七 27)、ヤコブはヨセフの子マナセとエフライムを祝せり(創四八 14)。

16 「^六視よ、或人みもとに來りて言ふ『師よ、われ永遠の生命をうる爲には、如何なる善き事を爲すべきか』」

○人の救はるるには、欠点を知りて悔改めねばならぬ。(富める)青年には向上の心はあつた。されどまだ靈の目は開かなかつた。自分を完全な者であると思つた。多分人からもそう云はれたであらう。イエスを善き師と呼んだなら、イエスより善き青年よと呼ばれると思つたであらう。彼が戒めを守ると云ふも、単に表面的のものであつた。道徳的実践を以て天國を買はんとする者である。

○たとひ我財産を^{たす}尽くし、亦我体を焼かるるために渡すとも(火刑)、愛無くば我に益なしの哥前一二のポウロの語は、イエスの聖言に衝突するものにはあらず。イエスは青年に、汝は完全なる者にあらずとの警告を与へ給ふた。勿論何人にも其云ひ給ふではない。人によつて示し給ふ。警告は異なるにちがいない。各其弱点を示すもの、己の弱点を知る者は幸である。

○ナポレオンも、雀が丘にモスコウ市を望んで勝利の悲哀を感じ。ああ戦勝何物ぞ、名利何物ぞと、良心は稍目を覚まし、ダマスコの途上のポウロも既にステパノの殉教的体度に打たれて、己の態度を反省し、コーバジス「クオ・ヴァデイス」に於けるペテロ皆反省を促され、そこに精靈は下りて、救はれたるなり。自ら義人なりと思ふ者や富める者には、いつも謙遜し、反省の念起らず。従つて一代救はれざるもの多し。

○善人(所謂)の救はれざるは、傲慢にして、靈の眼の開かれざるためなり。悪人の救はるるは、只救はるるにあらず。自ら罪を知りて、悔改めんとする故なり。

21 「三イエス言ひたまふ『なんぢ若しもまた全からんと思はば、往きて汝の所有もちものを賣りて貧しき者に施せ、さらば財寶たからを天に得ん。かつ來りて我に従へ』」

○此世の物に執着してはならぬ。主の命令ならば、全て御心のままに捧げねばならぬ。

23 「三イエス弟子たちに言ひ給ふ『まことに汝らに告ぐ、富める者の天國に入るは難し。』」

○殆ど不可能の事なり。

29 「五また凡そ我が名のために、或は家、あるひは兄弟、あるひは姉妹、あるひは父、あるひは母、あるひは子、あるひは田畑を棄つる者は、數倍を受け、また永遠の生命を嗣がん。」

○國民として、一旦召集令下らば、親を忘れ、妻子を忘れ、家を忘れて戰場へ馳せ向ふ如く、信者は神の命令一度降らば、又一切を捨てて神の為に尽すべきである。

○財産も、生命も、体も、全て神の物である。棄つると云ふは、之に執着する考へを捨て、之を神の物として扱ふことである。神に捧げることである。家をも神の家(其主は神)其兄弟も肉の兄弟にして、神に連なる兄弟、其父母も神を信ずる父母、其子も神を信ずる子となすべきである。悪魔が悪い事を教へぬ先に神の事を教ふべきである。悪魔より先回りをすべきである。富める青年、酒色の為に浪費するも、善き事の為に出すことは嫌いである。

第二〇章

1 「天國は勞働人を葡萄園に雇ふために、朝早く出でたる主人のごとし。」

〔天國〕 ○救ひのこと

3 「また九時ごろ出でて市場に空しく立つ者どもを見て、」

○一時間も早く主の招きに應ずべきである。

○一生は一日の積重なりである。一日は一生の縮図である。一日を粗末にする人は、一生を粗末にする人である。朝早くは子供時代（世の中は一日の他は無かりけり。昨日は過ぎつ。明日は知られず。）葡萄園に勤勉に働くべきである。子供の時の習慣は一生を貫くものである。汝の若き日に汝の造主を覚えよ。（傳一一一）
修養も奉仕も若い時に始めるべきである。ブース（チャールズ・ブース 1840-1916 イギリス社会調査家）は十五の時生涯を神に捧げ、内村氏は札幌時代に石狩川畔に献身した。

11 「受けしとき、家主にむかひ咄きて言ふ、」

○咄く勿れ。却て神の為に又聖旨に叶ふべく、一日も一時間も多く働き得たることを感謝すべきである。

○不平を起す勿れ。高ぶること勿れ。

○家司はキリスト

○朝に道を聞かば、夕に死すとも可也。（論語）

16 「かくのごとく後なる者は先に、先なる者は後になるべし」

○先に救はれて損をしたと思つてはならぬ。却て感謝すべきである(太一九30)。

「斯の如く」○油断すれば

18 〽19 「二八」視よ、我らエルサレムに上る、人の子は祭司長・學者らに付されん。彼ら之を死に定め、一九また嘲弄し、鞭うち、十字架につけん爲に異邦人に付さん、かくて彼は三日めに甦へるべし」

○弟子達には此意味がよくわからなかつた。イエスはエルサレムに行きて殺さることを語り給へるが、今は明白に十字架に付けらるることを告げた。ヤコブはヘロデアグリツパ王に紀元四十四年に殺され、ヨハネは釜にて煮られたれども、不思議に逃がれと云はれている。

20 「二〇」ここにゼバダイの子らの母、その子らと共に御許にきたり、拜して何事か求めんとしたるに、

「ゼバダイの子らの母」○ヤコブ、ヨハネの母にて、ゼバダイの妻は、主の母マリアの姉なりし如し(約一九25)。
名はサロメ。

21 「三一」イエス彼に言ひたまふ『何を望むか』かれ言ふ『この我が二人の子が汝の御國にて、一人は汝の右に、一人は左に坐せんことを命じ給へ』

「一人は汝の右に、一人は左に」○ヤコブ、ヨハネ

25 「三五」イエス彼ら呼びて言ひたまふ『異邦人の君のその民を宰どり、大なる者の民の上に權を執ることは、汝らの知る所なり。』

○汝等の考は誤れり。キリストの命を得よ。

26 〽28 「二六」汝らの中にては然らず、汝らの中に大ならんと思ふ者は、汝らの役者となり、二七 首たらんと思ふ者

は汝らの僕しもべとなるべし。二八かくのごとく、人の子の來れるきたも事つかへらるる爲にあらざ、反つて事ふることをなし、又おほくの人の贖償あがなひとして己が生命を與へん爲なり』」

○信者は己れの誉れをあげ、權勢を振るふことは目的ではない。神のため、人のため、特に人の救はるるために働くべきである。奉仕の生活。議員に當選して喜ぶ者もあるが、信者の喜びはそれと異なる。

○此世にて樂をする爲めに生れて來たと思ふ。故にいろいろの不安が起るのである。善き事の爲めに働くために生れて來たと覺悟し、イエスに見習ひて日々を送るべきである。

第二章

○王の王、萬國の救主、永遠の主は、ここに父の命を全ふすべく、定められた都に入り給ふた。されど旅順の乃木奉天の大山其他の入城式に比して、如何に微々たる有様であつたか。位ある人、尊き人、富める人、名譽ある人は一人もいなかった。一行十三人、歓迎せるものはわづかに無智の卑しき群衆にすぎなかつた。イエスの都に入りて眞先になされたことは宮潔みやきよめであつた。イエス様は己れの体を宮に喻へ給ふた。信者として第一になすべきことは、此心を清むることである。所謂悔改めである。此事は神の御心に叶えることであつた。されど之を誉めたる者は癒された。盲人や足なへや、子供であつた。怒り嘲つたのは、有力なる祭司や學者や長老であつた。第二になされたことは、哀れなる者を救はれたことである。第三になされたことは、実の無いイチジクの木を涸らされたことである。イエスの御心は、弟子をして、人は此世の邪魔者となることとなく、実行の必要なること、実行なき者は罰せらるべきことを悟らしむにあつたと思はれる。続いて信じて祈るべきことを教へられた。第四は、教権問題、資格問題である。傳道者として、イエスは此世的には無資格であつた。田舎の大工の子として長じ給ふた。規則的の宗教教育を受けられなかつた。祭司長より免許状を与へられなかつた。

1 「彼らエルサレムに近づき、オリブ山の邊ほとりなるベテパゲに到りし時、イエス二人の弟子を遣さんと言ひ給ふ。」

「オリブ山」○オリブ山はエルサレムの東に在り、其頂上は東の石垣より七八町にすぎず。其南の肩を過ぎて、ベタニヤよりエリコに行く道あり。エルサレムよりベタニヤに至る二十四町山の東に在り。ベタニヤよりベテパゲに至る時、エルサレムの都を望み得べし。

「ベテパゲ」○ベテパゲは無花果いちじくの家と云ふ意。

3 「誰かもし汝らに何とか言はば「主の用なり」と言へ、さらば直ちに之を遣さん」

○主の用として、我等は全て物を捧げねばならぬ。イエスは世界の王である。王として最後の都入りである。イエスの評判は頂点に達した。数日の後、同じ群衆は十字架に付けよと罵った。頼みにならぬは人心である。

イエスに対してかくあつてはならぬ。我等の友情も然りである。

5 「五」シオンの娘に告げよ、「視よ、汝の王、なんぢに來り給ふ。柔和にして驢馬ろばに乗り、輓くみきを負ふ驢馬の子に乗りて」

○イエスは世界の王なり（ゼガ亞九9）。約五百年前の預言者。

「シオン」○シオンはエルサレムの都のうちにて、西南にある山にて、ダビデ其上に宮殿を建てたり。

9 「九かつ前にゆき後にしたがつ群衆よばはりて言ふ『ダビデの子にホサナ、讚むべきかな、主の御名によりて來る者。いと高き處にてホサナ』」

○誉める者、そし誇る者、疑ふ者、種々さまざま。イエスは又世界の主なり。

「ホサナ」○萬歲

「主の御名によりて」○主の御名を以て。

10 「二〇遂にエルサレムに入り給へば、都擧りて騷立ちて言ふ『これは誰なるぞ』」

○其夜ベタニヤ帰り給ひ。四月十日、日曜日(可一一11)。四月十一日、月曜日の朝、ベタニヤより再び都に上り給ふ。

12 「二一イエス宮に入り、その内なる凡ての賣買する者を逐ひいだし、兩替する者の臺、鴿を賣る者の腰掛を倒して言ひ給ふ、」

○人は聖靈の宮である(哥前六19)。酒樽にしたり、不義の快樂の器としたり、強盜の巢としてはならぬ。又教會、禁酒會をかくなしてはならぬ。当時の祭司長、學者等が神殿を汚し、商人より税を収めて、普通の事と思ひ、之を追出したるイエスを憎みたるは甚だ誤れりと云ふべし。欠点を指摘されたらば、却て感謝すべきである(賽五六7)。昔は善光寺の境内に藤八指南所(藤八拳の教習所)と云ふがあつたと云ふ。伊勢の古重(伊勢神宮の式年遷宮のこと)。

16 「二六イエスに言ふ『なんぢ彼らの言ふところを聞くか』イエス言ひ給ふ『然り』嬰兒乳兒の口に讚美を備へ給へり』とあるを未だ讀まぬか』」

○詩八2

17 「二七遂に彼らを離れ、都を出でてベタニヤにゆき、そこに宿り給ふ。」

「ベタニヤ」○ベタニヤは棗なつめの家の意。

18 「二八朝早く都にかへる時、イエス飢ゑたまふ。」

○馬マルコによれば、十八以下の事は、宮清めの朝にて、枯れたるを發見したのは、其翌日のこととしてある。

22 「三いのりかつ祈いのりのとき何にても信じて求めば、ことごとく得うべし」

○卒業証書は宗教家を造るものにあらず。ヨハネの来りて、天国は近づけり、悔改めよと云ひて、ヨルダン川にバプテスマをなせる時、多くの人々は悔改めて、バプテスマを受けたり。されど祭司長、長老、學者等は之を信じざりき。之傲慢にして、善を聞きても、従ふことをなさず、其罪を誠に自覺して悔改めなかつた。イエス来り給ふも亦そうであつた。ヤコブ、ヨハネ等は、始めはヨハネの弟子であつたと云ふ。ヨハネを眞の預言者と信ぜば、イエスの神より遣はされしを信ずべきである。ヨハネはイエスにつきて証せる者であるからである。

23 「三三宮三に到りて教へ給ふとき、祭司長・民の長老ら御許に來りて言ふ『何の權威をもて此等の事をなすか、誰がこの權威を授けしか』」

○資格、資格の世なる哉。ジョージ・フォックス(1624-1691 イングランド、クエーカーの創始者)曰く、牛津(オックスフォード) 劍橋(ケンブリッジ)の基督教會に最も欠けたるものは祈禱であると云ふ。もつともつと祈るべきである。

26 「六六もし人よりと言はんか、人みなヨハネを預言者と認むれば、我らは群衆を恐る」

○ヨハネの死後、ユダヤ人は皆預言者たることを認めた。

「かれを」○かれの云ふところを

27 「七七遂に答へて『知らず』と言へり。イエスもまた言ひたまふ『我も何の權威をもて此等のことを爲すか汝らに

告げじ。」

○告ぐるとも信ぜず。言より行が大事。

32 「三」それヨハネ義の道をもて來りしに、汝らは彼を信ぜず、取税人と遊女あそびめとは信じたり。然るに汝らは之を見しのち後も、なほ悔改めずして信ぜざりき。」

○之を見し後は、取税人や遊び女の信じて悔改めたるを見ても意。祭司、長老等は兄にあたる。主よと云ふ者悉(ことごと)く天国に入るにあらず。只天にいます我父の御心を行ふ者のみ之に入るべし。悔改めよ。実行の人たれ。取税人。遊女よく己れの罪に気がつくこと早し。

「信じたり」○ヨハネの云ふところを信じたり。

33 44 「三」また一つの譬を聽け、ある家主いへあるじ、葡萄園ぶどうぞのをつくりて籬まがきをめぐらし、中に酒槽さかぶねを掘り、櫓やぐらを建て、農夫どもに貸して遠く旅立せり。三四 果期みのりどきちかづきたれば、その果を受取らんとて僕らを農夫どもの許に遣ししに、三五 農夫どもその僕らを執へて、一人を打ちたたき、一人をころし、一人を石にて撃てり。三六 復またほかの僕らを前よりも多く遣ししに、之をも同じやうに遇へり。三七 「わが子は敬ふならん」と言ひて、遂にその子を遣ししに、三八 農夫ども此の子を見て互に言ふ「これは世嗣なり、いざ殺して、その嗣業を取らん」三九 かくて之をとらへ、葡萄園の外に逐ひ出して殺せり。四〇 さらば葡萄園の主人あるじきたる時、この農夫どもに何を爲さんか」四一 かれら言ふ「その悪人どもを飽くまで滅し、果期におよびて果を納むる他の農夫どもに葡萄園を貸し與ふべし」四二 イエス言ひたまふ『聖書に、四三 造家者いへつくぢらの棄てたる石は、これぞ隅の首石すみおやしとなる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇くしきなり』とあるを汝ら未だ讀まぬか。四四 この故に汝らに告ぐ、汝らは

神の國をとられ、其の果を結ぶ國人は、之を與へらるべし。四四 この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうへに倒るれば、其の人を微塵みじんとせん』」

○農夫共はユダヤ人である。家主は神である。葡萄園はユダヤの國である。僕は預言者である。其子はキリストである。悪しき農夫の親方株は祭司長等である。汝等の何たるか、我の何たるか。又汝等が今我になさんとするかは、此譬にて明かなるべし。此譬にて、第一持主の寛大を思ふ。第二、農夫は持主の寛大を軟弱と解し、之を愚弄し、後継を殺し、田園を横領せんとした。併し、家主は決して軟弱ではない。第三、(以下 欠)

○世人は悪農夫の如く、全てが神の所有たることを知らずして、己れの所有となさんとす。

42 「四四 イエス言ひたまふ『聖書に、「造家者らの棄てたる石は、これぞ隅の首石となれる、これ主によりて成れるにて、我らの目には奇しきなり」とあるを汝ら未だ讀まぬか。』」

○ソロモン大王がエルサレムの宮を建てた時、建築師も始末にゆかぬ大なる石があつたが、後になつて其石が宮の土台となつた。造家者は専門家である。世の人に捨てらるるとも、神に選ばるる者とならねばならぬ(詩 一一八 22〜23、賽二八 16)。

44 「四四 この石の上に倒るる者はくだけ、又この石、人のうへに倒るれば、其の人を微塵とせん』」

○ロングヘロー(ヘンリー・ワーズワース・ロングフェロー 1807-1882 アメリカの詩人)曰く、神の白は回る こと遅くも、微塵に碎くと。

第二章

2 3 「二」天國は己が子のために婚筵を設くる王のごとし。三 婚筵に招きおきたる人々を迎へんとて僕どもを遣ししに、來(きた)たるを肯(うけが)はず。」

○主に逆ふ者となること勿れ。佛教に於ては、人世は無常を高調す。四大空也と云ふ。キリスト教に於ては、人世は事実なり、希望なり、感謝なりと云ふ。

〔僕〕○僕は預言者である。

4 「四」復(また)ほかの僕どもを遣すとて言ふ「招きたる人々に告げよ、視よ、晝餐(ひるけ)は既に備(そな)はりたり。我が牛も肥えたる畜も屠られて、凡ての物備りたれば、婚筵に來れと」

○葬式と結婚の差異がある。失望ではなく、福音である。父なる神は、我等を愛して招き給ふ、御子は我等を赦(ゆる)し贖(あがな)はんとし給ひ、聖靈は潔めんとし、天の使も、山も川も救ひを祝し歌ふ。恵みはあふれ、天國は備へらるる。ヨハネ曰く、天國は近づけり。

11 「二」王、客を見んとて入り來り、一人の禮服(れいふく)を著(つ)けぬ者あるを見て、

○王子の結婚式に列する者は、式場の入口に用意せる礼服を着るべき規定である。我等は救ひを全ふするために、旧き人を脱ぎて新しき人を着るべきである(西三 9 10)。其靈にキリストイエスを着るべきである(羅 一三 14)。

○神は愛である。其民を天國に招き給ふ。而して此好意を拒絶するは無礼であり、罪惡である。招かれたるユ

ダヤ人は捨てられて、異邦人はもてなしにあへり。

14 「^四それ招かるる者は多かれど、選ばるる者は少し」

○選ばるるは主の心に叶ひて、選抜さるる人は少し。

15 「^五ここにパリサイ人ら出でて、如何にしてカイエスを言の綱こしらへに係わなけんかと相議あひばかり、」

○パリサイ派は独立党であつた。ヘロデ王がローマ政府と妥協するを憎んだ。併しイエスに対しては、双方惡意を抱いた。

17 「^七されば我らに告げたまへ、貢をカイザルに納むるは可よきか、惡しきか、如何に思ひたまふ」

○陰險極まる質問である。豚は繩に引かかるが、子供に引かかるかとの議論の如し、所謂スペクレーション(空しい憶測)。

19 「^九貢の金を我に見せよ」彼らデナリ一つを持ち來る。」

「デナリ」○デナリは銀貨。ローマ皇帝の命令にて造られたもの、納税には之を使用した。他にシケルと云ふ銀貨があつた。神殿の献金に用ひられた。

21 「^三彼ら言ふ『カイザルのなり』ここに彼らに言ひ給ふ『さらばカイザルの物はカイザルに、神の物は神に納めよ』」

○身も魂も神の物なり。全てを神も捧ぐべきである(羅^{ロマ}一二、一三六、七、八)。世に納税の義務を知り、それより更に大なる恵みを受けてあるに、神に捧げざる者多し。

23 「^三復活よみがへりなしといふサドカイ人ら、その日みもとに來り問ひて言ふ」

○サドカイ派は享樂主義者であり、殊に俗人であつた。未來を信ぜず、復活を信ぜず。

24 「^四師よ、モーセは「人もし子なくして死なば、其の兄弟かれの妻を娶りて、兄弟のために世嗣を擧ぐべし」と云へり。」

○申二五 5〜10

32 「^三「我はアブラハムの神、イサクの神、ヤコブの神なり」と言ひ給へることを未だ讀まぬか。神は死にたる者の神にあらず、生ける者の神なり」

○神は永遠の實在者である。アブラハムも、イサクも、ヤコブも、今神の國に生きて居る。神と共に神に頼りて生きて居る者は、神に肖て生きて居るものである。天国に於て妻を争ふが如きはあり得べからざることである。

37 「^{三七}イエス言ひ給ふ』「なんぢ心を盡し、精神を盡し、思を盡して主なる汝の神を愛すべし」

○心はハート、精神はソウル、意はマインド。不熱心、不誠実であつてはならぬ。不充分であつてはならぬ(詩一〇三 1、申六 5)。

38 「^{三八}これは大にして第一の誠命なり。」

「誠命」○誠命の数は六百余りあつた。

39 「^{三九}第二もまた之にひとし「おのれの如くなんぢの隣を愛すべし」

○隣とは他人の意。「神と人に」(利一九 18)

41 「^{四一}パリサイ人らの集りたる時、イエス彼らに問ひて言ひ給ふ」

○キリストの時代に於て、ユダヤに最も勢力ありし団体は、パリサイの徒であつた。パリサイとは「離れたる者」との意にて、世は汚れたり、己れ等は清しとの意。半政治、半宗教の団体にて、會員組織であつた。モ一セの律法を守ると称して、古代よりの儀式習慣を厳格に守るを考え、却て精神を忘れて、形式に陥り、傲慢の爲めに其心は暗くなつた。頑迷であつた。国粹主義、保守主義、愛国主義で、独立国たらんことを欲し、理想とする處は、ダビデの時代、ソロモンの時代であつた。当時の祭司の如きは、パリサイの徒の鼻息を窺ふものであつた。其收穫の十分の一を神殿に献げたが、それも眞に神を愛する心より出たものではなかつた。巷ちまたに立ちて長き祈りをしたが、それも眞の心ではなかつた。其心は矢張此世にあつた。畏るる所は此世であつた。此世の譽れ、此世の成功を求むるものであつた。とかく宗教は形式になりやすい。法然上人の「南無阿弥陀仏の唱へらるるところ本山なり」の意なり。

42 「四二『なんぢらはキリストに就きて如何に思ふか、誰の子なるか』かれら言ふ『ダビデの子なり』」

「ダビデ」○ダビデは約一千年前の人

44 「四四「主わが主に言ひ給ふ、われ汝の敵を汝の足の下に置くまでは、我が右に坐せよ」」

○詩一一〇 1

第二章

○二十三章は五章の幸福なる者の反対。

2 「『學者とパリサイ人とはモーセの座を占む。』」

「學者とパリサイ人」○人を導く地位に立つ。モーセは約千六百年前の人。

3 「『されば凡てその言ふ所は守りて行へ、されどその所作には效ふな、彼らは言ふのみにて行はぬなり。』」

○欧米人の云ふところは善し。なすところはよからず。日本人は如何。

5 「『凡てその所作は人に見られん爲にするなり。即ちその經札を幅ひろくし、衣の總を大きくし、』」

○日露戦争に於てロシア兵は、当時能く戦つた。併し日本兵は、将校の見て居る所では更に勇ましく戦つた。

經札きやうつだは聖書の句を記した札を皮袋に入れ、祈りの時、左の脇掛け或は額しやくに当てたり。笏しやくの如きものに似て
いる。

8 「『八されど汝らはラビの稱を受くな、汝らの師は一人にして、汝等はみな兄弟なり。』」

○ラビと云はるるを喜ぶな。当時年長けたる者を父と呼ぶ風ありき。徒七には、ステパノも群衆に向ひて、兄弟達よ、親達よと云ひ、カソリックにては牧師を神父と呼ぶ。

12 「『三凡そおのれを高うする者は卑うせられ、己を卑うする者は高うせらるるなり。』」

○偽謙遜、空遠慮も亦偽善なり。

13 「三禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、なんぢらは人の前に天國を閉して自ら入らず、入らんとする人の入るをも許さぬなり。」

○自ら悔改めず、救はれず、人の悔改めんとするを妨ぐ。

15 「五禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは一人の改宗者を得んために海陸を經めぐり、既に得れば、之を己に倍したるゲヘナの子となすなり。」

○パリサイ宗に率いる何れの宗教も、人を率いるに熱心であるが、率いられたる後の状態が、却て以前より悪しからば災である。

16 「六禍害なるかな、盲目なる手引よ、なんぢらは言ふ「人もし宮を指して誓はば事なし、宮の黄金を指して誓はば果さざるべからず」と。」

○パリサイの徒の云ふところは、普通の道理にも反している。日本にても武士の誓ふ時は、八幡を指して誓へり。されど主は、然り然り否否と云ひて誓ふべからずと教へ給へり。

23 「三禍害なるかな、偽善なる學者、パリサイ人よ、汝らは薄荷・蒔蘿・クミンの十分の一を納めて、律法の中に尤も重き公平と憐憫と忠信とを等閑にす。されど之は行ふべきものなり、而して、彼もまた等閑にすべきものならず。」

○パリサイ人は小善なれも、偽善的に行ひて却て神の一人子を殺すの大罪を犯せり。時計の針だけ修繕に持つて行った。

○レビ族は領地を有せず。故に他族の者は其收穫の十分の一をレビ族に納む。

24 「^{二四}盲目なる手引よ、汝らは^{ぶよ}衄^こを瀉し出して駱駝^{らくだ}を呑むなり。」

○モーセは小虫をも生き乍ら食するを禁ぜり。故に水を飲むに、若しポーフラにても居るかと思れて、水をこして飲む。小事を恐れて大事を忘る。

31 「^{三一}かく汝らは預言者を殺しし者の子たるを自ら證^{あかし}す。」

○汝等口にかう言ふと雖も、其なす所は悪しき。汝等の先祖と異ならず。汝等先祖のなし足らざりし悪事を行ひて、悪しき先祖の志を満足せしめよ。

35 「^{三五}之によりて義人アベルの血より、聖所と祭壇との間にて汝らが殺ししバラキヤの子ザカリヤの血に至るまで、

地上にて流したる正しき血は、皆なんぢらに報い來らん。」

○バラキヤの子ザカリヤは、ユダヤ人の罪を攻めたるため、神の宮の庭内にて、石に打たれて死ねり。前八百

四十年頃の人。究極キリスト者の務むるところは(太^{マタイ}二三 36 以下)。

37 「^{三七}ああエルサレム、エルサレム、預言者たちを殺し、遣されたる人々を石にて撃つ者よ、牝鷄^{めすじり}のその雛を翼の下に集むることく、我なんぢの子どもを集めんとせしこと幾度ぞや、されど汝らは好まざりき。」

○今も世界の民を、其羽の下に集めんとし給ふ。されど多くは却て離れんとす。

「集めんと」○救はんと。

39 「^{三九}われ汝らに告ぐ「讀むべきかな、主の名によりて來^{きた}る者」と、汝等のいふ時の至るまでは、今より我を見ざ

べし」

○御魂の結ぶ実は、仁愛、喜樂、平和、忍耐、慈悲、良善、忠信、溫柔、樽節(加^{ガラ}五 22)。諸の善と正義と誠

○主はパリサイとサドカイのパン種(^{五九}精神)を慎めと云はれた。
実あり(^{五六}弗五九)。

第二章

1 「イエス宮を出でてゆき給ふとき、弟子たち宮の建造物たてもものを示さんとて御許に來りしに、」

「宮の建造物」○ヘロデ王が多年手入れして善美を尽した

2 「答へて言ひ給ふ『なんぢら此の一切の物すべてを見ぬか。誠に汝らに告ぐ、此處ここに一つの石も崩されずしては石の上に遺のこらじ』」

○石垣の石の大なるものは、幅四間に達した。大阪城以上である。秦皇帝の阿房宮も関羽に焼かれ、露とおき、

露と消えぬる我が身かな。浪波の事は夢のまた夢（露とおき 露と消えにし 我身かな 浪速のことも 夢のまた夢 豊臣秀吉の辞世句）。

3 「三オリーブ山に坐し給ひしとき、弟子たち竊ひそかに御許に來りて言ふ『われらに告げ給へ、これらの事は何時あるか、又なんぢの來り給ふと世の終とは、何の兆あるか』」

○エルサレムの滅亡は何時なりや。イエスの再臨と世の終の兆きざしは如何。

5 「多五くの者わが名を冒し來り『我はキリストなり』』と言ひて多くの人を惑さん。』
○偽キリスト、イエス以外に救ありと云ふ者は皆偽者なり。

7 「即七ち「民は民に、國は國に逆ひて起たん」また處々に饑饉と地震とあらん、」

○偽預言者チウダ、羅馬政府に對して兵を上げ（徒二一 38）、エルサレム陥落前、ローマに内乱ありて、二年間に三帝暗殺せられ、カイザリヤにては、ユダヤ人と異邦人との間に戦争起りて、二万人死傷し、アレキサ

ンドリヤにては、ユダヤ人五万人虐殺せられ、饑饉の事は徒一一二八にもあり、地震も四十年に五回あり、疫病流行して死するもの三万、ネロ皇帝の虐殺は、紀元六十四年、キリスト信者は大正十二年の震災に、朝鮮人の憎まれたる如く、萬民に憎まれ「互に私、己れの罪を逃れんとして、兄弟を密告し。」

○地下三里の地は、今も猶火なりと云ふ。

11 「二」多くの偽預言者おこりて、多くの人を惑さん。」

○エルサレム滅亡以前に於けるエルサレム城中の状態。人々只此世をのみ愛し、人情日に輕薄となり。己れを愛することのみを知りて、人を愛することを損失と考へ、政治家は党派を分かつて、只己れの党のみを愛して相争つた。偽預言者、偽キリストはしきりに現われた。されどそれにもかかはらず、眞面目なる信者は段々増加し、世の迫害に耐えた。かくて福音は当時の全世界、アジア、ヨーロッパ、アフリカに広まつた。

12 「三」また不法の増すによりて、多くの人の愛ひややかにならん。」

○自分のことのみ思ひ、他を省みる暇無し。

13 「三」されど終まで耐へしるぶ者は救はるべし。」

○困難に会ふ時、信仰ぐらつく。

14 「四」御國のこの福音は、もろもろの國人に證をなさんため全世界に宣傳へられん、而してのち終は至るべし。」

○愛の神は不意に災を世に下し給はない。幾度か警告に警告を重ね、忍耐に忍耐を加へて、悔改めを促し給ふ。

七度を二十倍して許し給ふも、遂に忍耐尽くる時に滅ぼし給ふのである。故に我等は自ら悔改むるは勿論、一人なりとも悔改めに導き、亡ぶる者を一人も少なからしむべきである。

15 「^二五なんぢら預言者ダニエルによりて言はれたる「荒す惡むべき者」の聖なる處に立つを見ば(讀む者さどれ)」

○(但九 27) 「彼れ一週の間多くの者と固い契約を結ばん。而して彼れその週の半ばに犠牲と供物を廢せん。また荒す惡むべき者、翼(屋根)の上に立たん。かくて、遂に其定まれる災、荒さるる者の上に注ぎ下らん。」

20 「^{二〇}汝らの通ぐることに冬または安息日に起らぬように祈れ。」

○ユダヤ國は冬雨多し。

○安息日には家に居る。冬も然り。又途悪い。然るに過越の節に囲まれた。

22 「^三その日もし少くせられずば、一人だに救はるる者なからん、されど選民の爲にその日少くせらるべし。」

○其日は禍の日。三月囲まれて、八月に至つて陥落した。彼等は其苦しみの時思つたであらう。我等がかかる災に会ふは、キリストを殺した罰であらう。とかくに偽キリスト現れて、我はキリストなり、我に來れ、我汝等も救はんと。半年間のエルサレムの城中の有様は、実に混乱を極めた。地獄の如くであつた。かかる時種々の流言は行はる。流行病の盛な時などそうである。

26 「^六されば人もし汝らに「視よ、彼は荒野あらのにあり」といふとも出で往くな「視よ、彼は部屋にあり」と言ふとも信ずな。」

○主の再臨は密かに來らず。世界中の人民の悉が知る如くに現はれ給ふ。驚くべき榮光を以て來り給ふ。(黙一 7) に、全ての目彼を見ん。

28 「^八それ死骸のある處には驚あつまらん。」

○太八 22。死にたる者に、死にたる者を葬らしめよ。

○罪に死にたる者の上に、災の来るは当然なり。ローマ兵の旗には鷲の印あり。罪の拂ふ價は死なり(羅六 23)。
 憚るべきは罪である。

○彼等出で我等に背きたる人の屍を見ん。その蛆死なず。其火消えず。萬の人に忌み嫌はるべし。エルサレムの陥落は紀元七十年である。パウロ殉教は六十六年の夏と云はれている。ネロ皇帝の死は紀元六十八年である。ダニエルは紀前約六百年の人である・

30 「^{三〇}そのとき人の子の兆、天に現れん。そのとき地上の諸族みな嘆き、かつ人の子の能力と大なる榮光とをみて、天の雲に乗り來るを見ん。」

○嘆く者は主を信ぜざる者。信ずる者にとりては感謝であり、喜びである。何時主來り給ふとも可なりと、毎日夜怠ることなく準備すべきである。今日來り給ふとも。

31 「^{三一}また彼は使たちを大なるラツパの聲とともに遣さん。使たちは天の此の極より彼の極まで、四方より選民を集めん。」

○人の子は父の榮光を以て、其使達と偕に來らん。其時各の行によつて報ふべし(太一六 27)。墓にある者皆其声を聞いて(死にたる者の意。死にたる者が世の終まで墓の中に居ると云ふにはあらず)出づる時來らん。善き事をなしし者は生命を得るに甦り、悪しき事をなしし者は罪を得るに甦るべし(約五 28、29)。我等悉く眠るにはあらず。我等皆おわりの喇叭の鳴らんとき、忽ちまたたく間に化せん。そはラツパの鳴る時、死にし人蘇りて朽ちず。我等も又化すべければなり。撒前四 14 を以下見よ。彼は雲に乗りて來る。全ての目彼を見ん。彼を刺したる者も亦之を見るべし(黙一 7)。

37

「^三エノアの時のごとく人の子の來るも然あるべし。」

○ノアの時代にも洪水來りて世を亡ぼして後、新しき光は臨んだ。ノアは前約三千年。

第二章

○二十五章の喩は、つまり信、望、愛の三を教へられたものである。又神を愛し、イエスキリストを愛すると云ふても神酒を備へ、餅を備へ、のぼりを立てなくてもよい。神を愛するならば、人を愛せよと云ふのである。口だけの信仰でなく、実行せよ。

1 「このとき天國は、燈火ともしびを執りて新郎はなむせを迎へに出づる、十人の處女をとめに比ふべし。」

○處女は新婦の友人。燈火の器は小さい故に、別に油入れを持たねばならぬ。個人的責任の大切なること。不断の注意の大切なること。神に召さるる時の何時であるか。ルーテル曰く、「汝信するか。さらば汝大胆に告白せよ。汝大胆に告白せんか、さらば汝苦難に逢ふべし。汝苦難に逢はんか、さらば汝は主によりて慰めらるべし。信仰告白、十字架、恩寵之れ相次いで起るものなり。」と。

○汝等は世の光なり、地の塩なり。信仰の油を以て善き行ひを輝かせ。常に光を消すこと勿れ。井伊直孝は、老中永井尚政に教へて、油断大敵、信仰は人に分け与へ得るものにあらず。自ら養ふべきもの。

○此世に生きていうちさへよければ、死後などはどうでもよいと云ふは、暴飲暴食して病氣にかかり、或いは命を失つてもかまはぬと云ふに同じであり、又肉体のことのみ思つて、靈魂のことを忘れたものである。宗教に大小の別あれ、靈魂の不滅を信じない宗教は悪いのである。之を信じないものは宗教ではない。

5 「^五新郎遅かりしかば、皆まどろみて寝ぬ。」

○花嫁の家の傍にても。

6 「よなか夜半に「やよ、新郎なるぞ、出で迎へよ」と呼はる聲す。」

「やよ」○直に

「なるぞ」○来るぞ

「出で迎へよ」○用意せよ

10 「○彼ら買はんとて往きたる間に新郎きたりたれば、備へをりし者どもは彼とともに婚筵にいり、而して門は閉されたり。」

○ユダヤにて、結婚式は夜間花嫁の家にて行はれた。

「きたり」○再臨

13 「三されば目を覺しをれ、汝らは其の日その時を知らざるなり。」

○信仰的堅立を教へしもの。信仰は常に養ふべきものにて、急に得んとしても得ること能はざるものなり。

15 「五各人の能力に應じて、或者には五タラント、或者には二タラント、或者には一タラントを與へ置きて旅立せり。」

○一タラント二千円ばかり。銀は信仰を云ふのである。僕が主人より資本を与へらるる時、其小額を咄かずして商業を營むが如く、キリスト者は、与へられた信仰の少量なるを咄かず、神の為に戦はねばならぬ。善き商人は、利を思はずして働き、却て利益を得て事業は盛となる。信者も与へられた信仰を以て誘惑や迫害に囲まれつつ、上よりの力を浴びて、勇ましく戦ふ時に、信仰は自然に増すのである。

18 「然るに一タラントを受けし者は、往きて地を掘り、その主人の銀をかくし置けり。」

○才能足らず、勤勞心の乏しきを知るべし。

21 「主人いふ「宜いかな、善かつ忠なる僕、なんぢは僅なる物に忠なりき。我なんぢに多くの物を掌つかさどらせん、汝の主人の勸喜に入れ」」

「汝の主人の歡喜に入れ」 ○共に喜べ

24 「又また一タラントを受けし者もきたりて言ふ「主よ、我はなんぢの嚴しき人にて、播かぬ處より刈り、散らさぬ處より斂あつむることを知るゆゑに、」

○其信仰正しからず。主人(神)の心も性質も正しく理解せぬのである。かかること世に多し。人の前に我れを知らずと言わんものを、我も亦天にいます我父の前に知らずと云ふべし(太一〇33、路九26)。

汝口にて主イエスと云ひ表はし、又汝心にて神の彼を死より甦らししを信ぜば救はるべし。夫れ人は心に信じて義とせられ、口に云ひ表はして救はるるなり(羅一〇9、10)。

○己れの怠惰の言ひ訳の口実。独力では何も出来ぬならば、他の兄弟と協力して働くべきである。小資本も集めて大資本となる。

25 「五懼れてゆき、汝のタラントを地に藏かくしおけり。視よ、汝はなんぢの物を得たり」

○銀を地に隠すとは、己れの心に深く信仰を隠して、人に向つて告白しないのである。人を恐れ、迫害を恐れ、かくては信仰は少しも進まぬ。病氣であるとか、何であるとかで信仰の戦ひの出来ぬものは、少くとも信仰の告白だけはせねばならぬ。イエスの味方であるだけは人に知らせるべし。告白しただけでも幾分

利息は増す。告白せずして信仰は生きない。

31 「^三人の子その榮光をもて、もろもろの御使を率ゐきたる時、その榮光の座位くらゐに坐せん。」

○最後の審判には貧富、貴賤、人種、國籍の区別は無い。只善と惡の二つに区別される。愛無き者は神を知らず。神は即ち愛なればなり。孟子曰く、惻隱の心は仁の端也。「告子章句上六（一四六）」神を愛せんとせば人を愛せよ。

「榮光の座位に座せん」○王の王として来る。

46 「^{四六}かくて、これらの者は去りて永遠とこしへの刑罰にいり、正しき者は永遠の生命に入らん」

○やさしき愛の心の特徴とする信仰でなくては、眞の信仰でないと云ふのである。

第二章

1 「イエスこれらの言をみな語り^{ことば}をへて、弟子たちに言ひ給ふ」

○紀元三十年四月四日(火)オリブ山にて。

2 「『なんぢらの知ることく、二日の後は過越の祭なり、人の子は十字架につけられん爲に賣らるべし』」

○大悲劇。イエスは其死の意味と方法を能く予知された(太一七22、二〇18〜19)。一方に於ては既に謀殺の奸計は企てられて居た。併し其計画通りにならなかつた。神の御心の通りになつた。

○六日即ち木曜の(夜より)夕方より過越の祭は始まりて一週続く。

3 「『そのとき祭司長・民の長老ら、カヤパといふ大祭司の中庭に集り、』」

「カヤパ」○カヤパはアンナスの婿。

6 「『^六イエス、ベタニヤにて癩病人シモン^{らいびょうにん}の家に居給ふ時、』」

「ベタニヤ」○ベタニヤはエルサレムを距る二哩。

「シモン」○シモンはラザロの父と云ふ説がある、如何。

7 「^七ある女、石膏の壺に入りたる貴き香油^{たかじゆ}を持ちて、近づき來り、食事の席に就き居給ふイエスの首^{かうべ}に注げり。』」

「ある女」○約一二によればマリア^{ヨハ}。

「石膏の壺」○五十円位?。当時労働者一日の賃、一デナリなりしと云へば、三百デナリは、今の三百円位に當たるべし。

8 「八弟子たち之を見て憤ほり言ふ『何故かく濫みだりなる費つひえをなすか。』」

○怒つたのはユダだけではなかつた。他の弟子もそうであつた。此時弟子達はマリアを非難したよりも、更にイエスがマリアのなす所を咎められなかつたことを心の内に非難した。イエスに對して悪い感情を起した。弟子の氣分を失つて批評家となつた。とにかく此集りが分れ嶺みちとなつた。マリアは此他僕の為めと云ふ考があつたと思はれぬ。当時客をもてなすに、其頭に油を注ぐ風習があつた(約ヨハ一二)。期せずして葬儀の間にあつたものであろう。悲劇の原因は、弟子達はイエスを誤解していた。「汝はキリスト、神の子なり」と。ペテロは云つたが、それでも猶イエスの眞の使命を悟ることを得なんだ。今日の信者にも全ての事を判断するに、金錢を標準として判断するが世の常である。

弟子達も金のことを思つた。慈善はなさんと思へばいつでも出来るが、キリストの葬の備は二度と出来ぬのである。キリスト教を誤解して社會改良の一運動であると思つている者あるやうに、ユダは他の弟子より自我が一層強くあつた。汝等は己が求むる所を知らず(太マタ二〇二二)。

16 ○我国は此世の国にあらず。我等の国は天に在り(約ヨハ一八三六、腓ピリ三二〇)。
「二六ユダこの時よりイエスを付わたさんと好き機をりを窺ふ。」

○ユダは既に其金を受取つた。

23 「三答へて言ひたまふ『我とともに手を鉢ハチに入る者われを賣らん。』」

「鉢」○鉢はソースを入れるものにて、パンや野菜を侵して食するのである。

24 「四人は己に就きて録しるされたる如く逝くなり。されど人の子を賣る者は禍害わざはひなるかな、その人は生れざりし

方よりしものを』」

○悪しき者の群れ我を囲みて、我等及び我足を刺し貫けり。彼等互に我衣を分ち、我下着を籤くじにす。(詩二二)
 侮られて人に捨てられ、悲しみの人にして、悩みを知れり。彼は苦しめられるども、自ら謙へりくだりて口を開かず。屠場に引かるる子羊の如く、毛を切る者の前にもだす羊の如くして其口を開かざりき。彼は虐げと審きとによりて取去られたり。其代の人のうち誰が彼が活ける者の地より絶たれしことと思ひたりや。彼は我民の咎の爲めに打れしなり。其墓は悪しき者と共に設けられたれど、死ぬる時は富める者と共になれり。彼は暴あらびきを行はず、其口には虚いつわり無かりき(賽五三)。

25 「五イエスを賣るユダ答へて言ふ『ラビ、我なるか』イエス言ひ給ふ『なんぢの言へる如し』」

「なんじの言へる如し」○原文は「汝之を言へり。」(他の弟子は不注意であつた。)

28 「二八これは契約のわが血なり、多くの人のために、罪の赦ゆるしを得させんとて流す所のものなり。」

○モーゼは律法を民の前に読み、子羊、子牛の血を民に注ぎて曰く、「之れ神が汝等に命し給ふ契約の血なり」と(出二四8、來九18)。

29 「二九われ汝らに告ぐ、わが父の國にて新しきものを汝らと共に飲む日までは、われ今より後この葡萄ぶどうの果より成るものを飲まじ。」

「葡萄の実より成るもの」○ぶどう酒ではなく汁である。

36 「三六ここにイエス彼らと共にゲツセマネといふ處にいたりて、弟子たちに言ひ給ふ『わが彼處かしこにゆきて祈る間、なんぢら此處こゝに坐せよ』」

「ゲツセマネ」○ゲツセマネはオリブ山の麓

38 『三八』わが心いたく憂ひて死ぬばかりなり。汝ら此處に止りて我と共に目を覺しをれ』

○イエスの此時の苦しみは普通の死に対する苦しみだけではなかつた。人類全ての罪を負ひ給ふたのである。○幾度も思ひ定めて変わるなり。頼むまじきは我心かなで、自信とか確信とか決定と云ひても、誠に当てにならぬものである。鉄よりも堅いと云ふ決心が軽石よりも脆いもろことがある。人は自分に頼る時は必ず失敗する。イエスは此時決して強いことを云はれなかつた。否却て「我心いたく憂へて死ぬばかりなり。」と歎かれて祈られた。それで強きことを云つて誓つた者は負けて倒れて、泣いて祈つた者は勝つて立ち上がった。

39 『三九』少し進みゆきて、平伏し祈りて言ひ給ふ『わが父よ、もし得べくば此の酒杯さかづきを我より過ぎ去らせ給へ。されど我が意の儘にとにはあらず、御意のままに爲し給へ』

○「御心のままになし給へ。」眞に完全な祈りである。第一の祈りより第二の祈は、更に進歩したものであつた。それで誠に従順な祈であつた。全てを父の御心に一任したのである。問題全て解決した。其心に平和と勇氣が満ちた。弟子達の同情に訴ふる必要は無くなつた。

○これ最も謙遜なる祈りの大本義。

○古今未曾有の悲劇は演ぜられんとす。サタンは跳梁して、黒雲深く閉ざして、百鬼勢を逞くせんとす。弟子たる者勇氣を振ひ起して主と共に祈るべきである。されど口に強きことを云へるペテロはじめ主の苦しみをよそにして、居ねむりたり。不甲斐なき彼等よ。されど聖靈は云ひ難きの嘆きを以て我等の為に祈り給ふ。惑はしに入らぬやう祈るべきである。

40 「^{四〇}弟子たちの許にきたり、その眠れるを見てペテロに言ひ給ふ『なんぢら斯く一時も我と共に目を覺し居ること能はぬか。』」

○イエスは日頃特に愛された三人の弟子をせめてもの頼みとなされた。されどこれも頼みにならなかつた。ただ頼むべきは父より他無かつた。

45 「^{四五}而して弟子たちの許に來りて言ひ給ふ『今は眠りて休め。視よ、時近づけり、人の子は罪人らの手に付さるるなり。』」

○イエスかく云はれたる時、ふと頭を上げてユダ等の既に近づくを見られた。

47 「^{四七}なほ語り給ふほどに、視よ、十二弟子の一人なるユダ來る、祭司長・民の長老らより遣されたる大なる群衆、劍と棒とをもちて之に伴ふ。』」

○世に最悪最醜の者は、墮落信者である。ユダは終までイエスを信ずることが出来なかつた。自分の思う通りにイエスを使役せんとした。イエスが自分の思ふ通りにならぬを見て、イエスに背いた。イエスは之に対して無抵抗主義を取られた。マホメットは劍を以て宗教を広めたが、イエスは愛を以て広められた。平和の君である。ユダヤ人は思った。ロマ人を追ひ其羈絆きはんを脱し、ソロモン王朝の古に帰るは我等の理想である。汝キリストならば、汝自信及我等を救ふ筈である。十字架に釘つけられて己れを救ひ得ざる如きキリストは、我等には何の用も無いと云ふのである。彼は断じてキリストでは無いと云ふのである。かくて彼等は躓いたのである。

49 「^{四九}かくて直ちにイエスに近づき『ラビ、安かれ』といひて接吻くちづけしたれば、』」

○何と情け無きことか。

53 「^{五三}我わが父に請ひて、十二軍に餘る御使を今あたへらるること能はずと思ふか。」

「十二軍」○一軍六千なれば七万二千

56 「^{五六}されどかくの如くなるは、みな預言者たちの書の成就せん爲なり」ここに弟子たち皆イエスを棄てて逃げさりぬ。」

「預言者たちの書」○記者の語

57 「^{五七}イエスを捕へたる者ども、學者・長老らの集り居る大祭司カヤパの許に曳きゆく。」

「學者・長老」○神學者・教會の長老

59 「^{五九}祭司長らと全議會と、イエスを死に定めんとて、いつはりの證據を求めたるに、」

「全議會」○議會はサンヘードリン即ち教會議會の議員である。

61 「^{六一}『この人は「われ神の宮を毀ち三日にて建て得べし」と云へり』」

○イエスは之に似たことは云はれたが、自ら宮を毀つとは云はれなかった。又三日にて建つとの意味は全く別な意味であつた。カヤパにはイエスの言葉の眞の意味はわからなかつた。しかし表面だけの意味はわかつた。

○我等この宮を毀つ。我れ三日のうちに之を起さん(約^{ヨハ}二19)。

65 「^{六五}ここに大祭司おのが衣を裂きて言ふ『かれ瀆言をいへり、何ぞ他に證人を求めん。視よ、なんぢら今この瀆言をきけり。』」

○衣を裂いたのは、イエスの答が如何にも神を汚したる重大問題にて、憤慨に堪えぬ様子を示したのである。

彼等は思つた。偽善者の化の皮が剥がれた。やつと日頃の鬱憤が晴れた。此ざまは何だ。実に愉快だ。我党萬歳であると思つた。人を審くことの甚だ難しきことがわかる。恐るべき、慎しむべきである。神の子たる雪の如く白く、羊の如くやさしき救主を罪人として死刑に決定したのである。ペテロは一度は逃げたが、さすがに遠く離れてイエスの後を追つた。幾分の勇氣は残つていた。しかし婢女の一言に残つた一分の勇氣をも全く失つてしまつた。

73 「^{七三}暫くして其處に立つ者ども近づきてペテロに言ふ『なんぢも^{たしか}慥^{とちがら}にかの黨^{ぐん}與^りなり、汝の國^{くに}詛^そなんぢを表せり』」

○松の雪払えば元の緑かな。ひと時雨雨で元の月夜かな。過たば改むるに憚ること勿れ。

75 「^{七五}ペテロ』にはとり鳴く前に、なんぢ三度われを否まん』と、イエスの言ひ給ひし御言を思ひだし、外に出でて^{いた}甚く泣けり。」

○ペテロは鶏の声にて、彼の魂は呼び覚まされた。彼は悔改めた。悔改の涙無き人はもはや救はれぬ。

○如何にも人の弱いものであることがわかる。主よ弱き我等を助け給へと祈るべきである。

第二十七章

○死は誠に厳肅である。殊に義人の死は勇ましく、善人の死は麗しくある。ナポレオンは「ソクラテスは人として死に、キリストは神として死に給ふた。」と云つた。ゲーテの伝へる如く、キリストの十字架は、自ら十字架を負ひたる経験のある者のみか解することが出来るのである。如何なる大監督、大學者たりとも、悲哀の殿堂に於て悲哀を味ひし経験無き者は解することが出来ぬ。嗚呼人よ、汝に臨みし苦難に感謝せよ。十字架の死は、日本の磔刑はりつけより遙に残酷であつた。

○ローマ人の磔刑は最も残酷なものであつた。二、三昼夜間も苦しんで死ぬ者もあつたと云ふ。紀元三百二十年頃コンスタンチヌス大帝が信者となりて、此酷刑を廃された。されど此酷刑に会ひて天国に昇つた信者は、世界に於て甚だ多くあつた。しかし悪人も亦人である。幾分の人情はあつた。此苦痛の罪人に痺れ薬を飲まして、幾分軽減せしめんとする習慣があつたが、イエスは十字架に上りても猶全ふすべき務つとめがあつた。最後の五分間をよくせよと云ふことがあるが、イエスは実に最後まで雄々しかつた。

1 「^一夜明けになりて、凡ての祭司長・民の長老ら、イエスを殺さんと相議あひはかりり、^二遂に之を縛り、曳きゆきて總督ピラトに付せり。」

「夜明」○四月七日なりし。午前六時頃

3 「^三ここにイエスを賣りしユダ、その死に定められ給ひしを見て悔い、祭司長・長老らに、かの三十の銀ぎんをかへ

して言ふ、」

○罪を犯した後の心の状態、失望の極、更に暗きに向ひ、亡びに急ぐ者と悔改めて光に向ひ、救はるる者との二様あり。

○金曜日朝、ユダにして眞に悔いたらば、パウロの如くあるべきであつた。ユダは誠に此世の成功を思つた。其終も早まつた。眞の悔改でなかつた。只、後悔であつた。

○罪を犯した者の悲哀、そこに後悔あり。失望あり。やらなければよかつた。ユダは怒りにまかせて(イエス)に欺かれたと思つた。悪人同志の終は地獄の有様である。互いに罪の擦り付け合ひである。古物語にもよくある例である。慾に迷ひて毒藥など調合した医者等が、其毒藥にて殺されしことを。行列人を葬る悪人の味方となるべからず。

7 「^七かくて相議り、その銀をもて陶工^{すまづり}の畑^{はた}を買ひ、旅人らの墓地とせり。」

○陶工の畑は善き土を掘り取り、陶器の欠等を投げ捨て置きたる荒地價も安し。

8 9 「^八之によりて其の畑は、今に至るまで血の畑と稱へらる。^九ここに預言者エレミヤによりて云はれたる言

は成就したり。曰く『かくて彼ら値積られしもの、即ちイスラエルの子らが値積りし者の價の銀三十をとりて、』

○エレミヤは紀前六百年頃。されどこの預言は、^{ゼカ}亞一一 12 13 にあり、ゼカリヤはエレミヤより約百年後の人。

「今に至るまで」は此書の書かれたるイエス昇天後二十年位?

11 「^二さてイエス、總督の前に立ち給ひしに、總督問ひて言ふ『なんぢはユダヤ人の王なるか』イエス言ひ給ふ『なんぢの言ふが如し』」

○総督ポンテオピラト。イエスは其前に立たれた時は、カヤパの前に立たれた時より楽に感ぜられた。ピラトには憎しみは無かった。幾分の同情があつた。ピラトはイエスを見て、其風采一平民にすぎざるに驚き、怪しんだであろう。如何にもして之を許さんとした。而して其提案 17 の納れられざるや、之を当時エルサレムの逗留中のヘロデ王に送りて処分せしめんとせしに、ヘロデにイエスと見る明無く、奇跡を求めて納れられざるや(路二三^{ルカ}6-12)、再び之をピラトに返した。ピラトは群衆の前に手を洗ひて其反省を促したれども、かかる姑息手段は、暴民を服従せしむる力無く、何時の時代も脅迫に恐れ、正邪を明らかにすることを得ず。暴民も祭司等に教唆されて、重大なる罰の己れと己れの子孫に帰すべきを自ら保証して、悪事を遂行したのである。

○ピラトは人を恐れた。人望を失つて己れの地位を危うくせんことを恐れた。何時の世にもある俗吏根性であつた。一人の田舎者の生命に己れの地位を代へることは出来ぬと思つた。イエスはピラトのなす所を怒るよりも却つて憐れまれた。

○グラッドストーンやリンコルンの如き政治家は、信仰により力を与へられたものである。普通の政治家には到底望むことは出来ぬ。

○一九二四年排日案に署名した大統領クーリッジは、ピラトと同地位に置かれたものである。政治家によりて教勢の廣張を計らんとするは愚のことである。

○ピラトがイエスを裁判したでなく、ピラトがイエスに裁判されたのである。ピラトの人格、技倆、臆病等イエスの前に明かにせられたのである。

14 「^{二四}されど總督の甚く怪しむまで、一言をも答へ給はず。」

○イエスは既に運命を明かに知り給ふた。十字架は其前に見えているのである。弁解の必要を認めなかつた。又弁解の無益なることを覚悟して居られた。

17 「^{二七}されば人々の集れる時、ピラト言ふ『なんぢら我が誰を赦さんことを願ふか。バラバなるか、キリストと稱ふるイエスなるか』」

○審判人は最も正しく、公平でなくてはならぬ。ピラトはバラバが凶悪な有名な盜賊であつたから、イエスとバラバと何れを許すべきやと問はば必ずイエスと答ふるならんと思つた。しかし此巧みの如く見ゆる計画は見事に失敗した。かく云ふ時に一步群衆に讓歩したのである。決定の権はピラトを去つて群衆に歸した。世には讓るべきことと讓るべからざることある。利益問題の如きは讓つてよい。審判の如きは一步も枉^まげてはならないのである。

24
31 「^{二四}ピラトは何の效^{かひ}なく反つて亂^{らん}にならんとするを見て、水をと^り群衆のまへに手を洗ひて言ふ『この人の血につきて我は罪なし、汝等みづから當れ』^{二五}民みな答へて言ふ『其の血は、我らと我らの子孫とに歸すべし』^{二六}ここにピラト、バラバを彼らに赦し、イエスを鞭うちて、十字架につくる爲に付せり。^{二七}ここに總督の兵卒ども、イエスを官邸につれゆき、全隊を御許に集め、^{二八}その衣をはぎて、緋色^{ひいろ}の上衣をきせ、^{二九}茨の冠^{かかむり}を編みて、その首^{かうべ}に冠^{かむ}らせ、鞞^{かむ}を右の手にもたせ、且その前に跪^{ひざま}つき、嘲弄^{てうろう}して言ふ『ユダヤ人の王、安かれ』^{三〇}また之に唾し、かの鞞^{かむ}をとりて其の首を叩く。^{三一}かく嘲弄^{てうろう}してのち、上衣を剥ぎて、故の衣をきせ、十字架につけんとして曳きゆく。」

○ピラトは紀前二十六年より十年間ユダヤを支配せり。其支配中以前にも騒動起りて困しみたることあり。故にピラトは又騒亂の起ることを恐れ、己れの地位をも失はんことを恐れた。しかし其為一人の無罪の人を死刑に處したことは許すべからざる大罪である。殊に或は誇大妄想狂でもあるかと思つた。一田舎者であると思つた。何の價値なる者だと思つたのは、実に開關以来の尊き人であつた。神の獨子であつたことを思へば、実に恐るべき過を犯したものである。ピラトは初めより、厳格に其責任を行はんとしなかつたのである。又ピラトはイエスの罪無きを信じながら、之に死刑を宣告し、更に之を十字架に釘するに先立ちて、兵士に命じて之を鞭むちたしめた(當時の例であつた)のは、実に残酷極まるものにて、己れの地位さへ安全ならば如何なる罪惡をもなすと云ふ、俗吏根性である。かかる俗吏に支配さるる人民は誠に不幸である。併しイエスの死は一人ピラトだけの過ではなかつた。そこに祭司長、長老等の妬み、憎しみ、一般群衆の愚か、イスカリオテのユダの叛逆、ピラトの残酷、ヘロデの無情等、暗黒漠々、サタン勢をほしいままにして、皆共にサタンの命ずるままに大罪を遂げたのである。神は此時如何に悲しみ、嘆き、其一人子の健気なる行動を見つめ給ひしならんか。

○ラクダも時に針の孔を通ることがある。群衆に迫られて、無罪の人に死刑を宣告したピラトが、富める者の要求に易く従ふは明かな事実である。

28 「^{二八}その衣をはぎて、緋色の上衣をきせ、」

○緋色の上衣は役人の古着なりしならん。イエスは多くの者に嘲弄された。弄もてあそび者となつた。

32 「^{三三}その出づる時、シモンといふクレネ人にあひしかば、強ひて之にイエスの十字架をおはしむ。」

「クレネ人」○アフリカ

33 「三かくてゴルゴタといふ處、即ち髑髏されかべの地にいたり、」

「ゴルゴタ」○ヘブル語。ギリシヤ語クラニオン。ラテン語カルバリ。

34 「三苦味を混ぜたる葡萄酒を飲ませんとしたるに、嘗めて、飲まんとし給はず。」

「苦味を混ぜたる葡萄酒」○此痺れ薬の費用はエルサレムの情けある婦人達が醸金きぎんしたものであったと云ふ。

46 「四六三時ごろイエス大聲に叫びて『エリ、エリ、レマ、サバクタニ』と言ひ給ふ。わが神、わが神、なんぞ我を見棄て給ひしとの意いなり。」

○詩二二一である。日用語たりしアラミ語である。

48 「四八直ちにその中の一人はしりゆきて海綿うみわたをとり、酸すき葡萄酒を含ませ、葦につけてイエスに飲ましむ。」

「酸すき葡萄酒」○当時の麻酔薬であつた。幾分苦痛を輕からしむものであつた。イエスは之を飲まなかつた。

50 「五〇イエス再び大聲に呼はりて息絶えたまふ。」

○イエスは刑吏共の為に祈られた。父よ彼等を許し給へ。彼等は其為す所を知らざる故になり(路二三34)。

又母の事をヨハネに委ね給ふた(約一九26以下)。全てを全ふして、後事おわ竟畢りぬと云はれて醋すを受けられた。釘つけられてより六時間にて絶息された。イエスの息絶え給ふと同時に三つの異象が現はれた。此奇跡皆深き意味がある。

51 「五」視よ、聖所の幕、上より下まで裂けて二つとなり、また地震ちふるひ、磐いはさけ、」

○祭司長が年に一回贖罪の子羊の血を注ぐべき入りたる至聖所は、幕裂けて、何人も神に直に近づくことを得

るに至つたのである(來九章)。神と信者との間は他の教職を要せず。イエスの贖あがない(子羊の血)によりて何人も神に近づくことを得るのである。此自由はイエスの死によつて与へられた(來七19)。イエスが人類の大祭司となり給ふたのである。種々の難しき犠牲や儀式は不必要になつたのである。二、三の奇跡は世の終りの有様の型である。地震は裁き、復活は救ひである(哥前一五52)。

53 「五三イエスの復活よみがへりののち墓をいで、聖なる都に入りて、多くの人に現れたり。」

○勿論夢にてなるべし。

57 「五七日暮れて、ヨセフと云ふアリマタヤの富める人きたる。彼もイエスの弟子なるが、」

○アリマタヤはエルサレムの北十八哩。ヨセフは又議員であつた。

ヨセフはニコデモと同じく密かにイエスの弟子となれるものであつた。彼は其勢力を利用した。ヨセフは最高裁判所の議員であつた。

60 「六〇岩にほりたる己が新しき墓に納め、墓の入口に大なる石を轉まわしおきて去りぬ。」

○其墓は悪しき者と共に設けられたれど(賽五三9)、死ぬる時に富める者と共になれり。(悪人と共に葬られず)死に先だつて價高き香油を塗られ、油の用意は周到である。

○罪無き者に死は無いと云ふが聖書の唱道である(腓二6〜11)。普通は罪人の屍は十字架上に置いて、鳥の啄むにまかせた。

62 「六二あくる日、即ち準備日の翌日、祭司長らとパリサイ人らとピラトの許に集りて言ふ、」

「あくる日」○八日

66

〔準備日の翌日〕 ○土曜

〔^{六六}乃ち彼らゆきて石に封印し、番兵を置きて墓を固めたり。〕
○ピラトの兵士を借りて番兵となしたのである。

第二十八章

6 「六此處には在さず、その言へる如く甦へり給へり。來りてその置かれ給ひし處を見よ。」

○イエスの復活は奇跡中の奇跡である。之を信するに心の状態を考へねばならぬ。而して最も適當なる時は、信者が死に直面した時である。ロングフェローの詩に、人生は眞なり。人生は眞面目なり。墓は其終極にあらざるなり。テニソン(アルフレッド・テニソン 1809-1892 イギリスの詩人)は云ふ、凡てが墓に終るとあらば、人の世にある何故か。愛する者を墓に納め、淋しく家に帰る時に明かにわかるのである(哥後五 2)。イエスは十字架の上に死に、三日にして甦り、父なる神より命ぜられし使命、人類の罪を赦す信ずる者の大事業を全ふせられた。故に、信者は又人を憎むことなく、人の罪を赦すべきである。人を寛大に扱ふべきである。国と国争ひ、憎み会ふ者は、又眞のキリスト教国と云ふことを得ざるものである。女は時として男より勇ましくある。

15 「^か五彼ら銀をとりて言ひ含められたる如くしたれば、此の話ユダヤ人の中にひろまりて、今日に至れり。」

○紀元七十年頃と云ふ?

20 「^{二〇}わが汝らに命ぜし凡ての事を守るべきを教へよ。視よ、我は世の終まで常に汝らと偕に在るなり」

○我等はイエスの御魂を心に宿し、彼と偕にある生活を營まねばならぬ(加二 20)。

○キリストの愛に励まされて、愛の人となるべし。支那人曰く、「出師^{すいし}の表を読みて泣かざる者は人に非ずと。」
主の十字架を仰ぎて泣かざる者は、眞に人に非ずと云ふ。